

御陵遺跡 1

— 第2～5次調査 —

ヒケシマ遺跡 2

— 第3次調査 —

大野城市文化財調査報告書第226集

2025

大 野 城 市

ご りょう
御陵遺跡 1

— 第2～5次調査 —

ヒケシマ遺跡 2

— 第3次調査 —

大野城市文化財調査報告書第226集



2025

大野城市

序

大野城市は福岡平野の一角にあたり、北側に大城山、南側に背振山系が広がる縦長の市域を有しています。市北部には大野城跡、中央部に水城跡、南部に牛頸須恵器窯跡とそれぞれ国指定史跡が所在し、それらを中心に数多くの文化財が残る歴史豊かな街です。

今回報告する御陵遺跡とヒケシマ遺跡は市の北東部に所在し、それぞれ月隈丘陵から派生する丘陵上と、王城山に連なる乙金山から派生する丘陵の裾部に位置します。御陵遺跡の報告は、これまでの8次にわたる調査のうち第2次から第5次調査までの成果です。調査により、弥生時代の住居跡や貯蔵穴、弥生時代の終わり頃から古墳時代初頭頃の石蓋土坑墓などが確認されました。さらに、古代に丘陵斜面を一部平坦に造成し、掘立柱の建物を建てていたことも確認されました。これらに加え、近世の陶磁器や柱穴なども確認され、御陵遺跡での人々の活動が弥生時代から江戸時代まで断続的に続いていることが明らかとなりました。

ヒケシマ遺跡では、これまで行われた2次の調査で弥生時代中期の住居跡や甕棺墓などが確認されています。今回報告する第3次調査では土坑などから弥生時代の遺物がわずかではありますが確認されました。今回の調査区では確認された遺構や出土遺物の量が少なかったため、遺跡の縁辺部と考えることができます。近隣の中・寺尾遺跡や森園遺跡も含めた遺跡の広がりを考える上で貴重な成果といえます。

本報告書による発掘調査の成果が、今後教育や研究の面におきまして広く活用していただけることを願っております。

最後になりましたが、事業者をはじめ地元の方々にご協力とご理解をいただきましたこと厚く御礼申し上げます。

令和7年3月31日

大野城心のふるさと館
館長 赤司 善彦

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が発掘調査を実施した御陵遺跡第2～5次調査、およびヒケシマ遺跡群第3次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大野城市教育委員会が実施した。
3. 整理作業は、大野城市の単費事業として実施した。
4. 本書における遺構の分類番号は、SA：柵・土塁・塙、SB：掘立柱建物、SC：竪穴住居跡、SD：溝、SE：井戸、SF：道路状遺構、SH：広場、SJ：甕棺墓、SK：土坑、SP：ピット、SR：祭祀遺構、ST：古墳・木棺墓・土坑墓・石棺墓、SX：性格不明遺構とした。
5. 発掘調査は、御陵遺跡第2～5次調査を早瀬賢、ヒケシマ遺跡第3次調査を上田龍児が担当した。
6. 遺構写真は、各調査担当者が撮影した。
7. 遺物写真は、写測エンジニアリング株式会社（牛嶋茂）が撮影した。
8. 遺構図面の作成は、大野城市教育委員会が行った。
9. 遺構図の方は御陵遺跡第2～5次調査は座標北、ヒケシマ遺跡第3次調査は磁北を表す。
10. 遺物実測図は、小畑貴子・古賀栄子・小嶋のり子・篠田千恵子・眞田萌世・津田りえ・仲村美幸・氷室優・松本友里江が作成した。
11. 製図は、小嶋が作成した。
12. 拓本は、小畑・篠田・氷室・松本が作成した。
13. 観察表は、古賀が作成した。
14. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/25,000 地形図『福岡南部』を使用した。
15. 発掘調査で出土した遺物の分類基準は、以下の文献を参考とした。
柳田康雄 1991「2土師器の編年 2九州」『古墳時代の研究』6 雄山閣
中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』
九州近世陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会 10周年記念—』
16. 本書の遺物・実測図・写真はすべて大野城市が管理・保管している。
17. 本書の執筆・編集は石川健が行った。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査体制	1
II. 位置と環境	3
III. 御陵遺跡第2～5次調査の結果	
1. 調査にいたる経緯	5
2. 第2次調査	5
(1) 調査概要 (2) 遺構と遺物 (3) 小結	
3. 第3次調査	12
(1) 調査概要 (2) 遺構と遺物 (3) 小結	
4. 第4次調査	40
(1) 調査概要 (2) 遺構と遺物 (3) 小結	
5. 第5次調査	46
(1) 調査概要 (2) 遺構と遺物 (3) 小結	
6. まとめ	59
IV. ヒケシマ遺跡第3次調査の結果	
1. 調査の経緯と概要	61
2. 調査の結果 遺構と遺物	63
3. まとめ	65

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	4
第2図 御陵遺跡第2～5次調査区の位置図 (S=1/3,000)	6
第3図 御陵遺跡第2次調査遺構配置図 (S=1/125)	7
第4図 SK01 実測図 (S=1/40)	7
第5図 SK01、SD01・03、SP09 出土遺物実測図 (S=1/3)	8
第6図 SD01 実測図 (S=1/80)	8
第7図 SD03 実測図 (S=1/80)	9
第8図 根石、柱痕検出ビット平面図 (S=1/60)	10
第9図 御陵遺跡第3次調査遺構配置図 (S=1/400)	13～14
第10図 SC01 (SX01) 実測図 (S=1/80)	15
第11図 SC01 (SX01) 出土遺物実測図 (18～25はS=1/2、その他はS=1/3)	16
第12図 SC02 実測図 (S=1/80)	17

第13図	SB01～03 実測図 (S=1/80)	19
第14図	1号石蓋土坑墓 (SK01) 実測図 (S=1/30)	21
第15図	1号 (SK01)、2号石蓋土坑墓 (SK02) 出土遺物実測図 (S=1/2)	21
第16図	2号石蓋土坑墓 (SK02) 実測図 (S=1/30)	22
第17図	SK03 実測図 (S=1/60)	23
第18図	SK03、06 出土遺物実測図 (29、34、35はS=1/3、その他はS=1/2)	24
第19図	SK04、05 実測図 (S=1/60)	25
第20図	SK06、07、08 実測図 (S=1/60)	26
第21図	SK09 実測図 (S=1/60)	27
第22図	SK11、12 実測図 (S=1/60)	28
第23図	SK13 実測図 (S=1/40)	29
第24図	SK13 出土遺物実測図 (43はS=1/2、その他はS=1/3)	29
第25図	SK14～16・SD01、SK22 実測図 (S=1/60)	30
第26図	SK22 出土遺物実測図 (S=1/3)	31
第27図	SD02、03、SX07 実測図 (S=1/200)	32
第28図	SD02～05 出土遺物実測図 (53～55はS=1/4、その他はS=1/3)	33
第29図	SD04、05、SX08 実測図 (S=1/150)	34
第30図	SX02、04 実測図 (S=1/40)	36
第31図	SX02、04、05 出土遺物実測図 (57・58はS=1/2、その他はS=1/3)	37
第32図	SX05 実測図 (S=1/40)	37
第33図	その他の出土遺物実測図 (63～66はS=1/2、その他はS=1/3)	38
第34図	御陵遺跡第4次調査区現況測量図 (S=1/400)	40
第35図	御陵遺跡第4次調査区遺構配置図と周辺の地形 (S=1/300)	41
第36図	SK01 実測図 (S=1/40)	42
第37図	SK02 実測図 (S=1/40)	42
第38図	SD01 実測図 (S=1/100)	43
第39図	SD04 実測図 (平面図S=1/160、土層断面図はS=1/80)	44
第40図	御陵遺跡第4次調査区出土遺物 (S=1/3)	44
第41図	御陵遺跡第5次調査区遺構配置図 (S=1/160)	46
第42図	SC01 実測図 (S=1/60)	47
第43図	SC02 実測図 (S=1/60)	48
第44図	SC02 出土遺物実測図 (S=1/2)	48
第45図	墳丘とSK03 (石蓋土坑墓) 実測図 (S=1/80)	49
第46図	SK03 (石蓋土坑墓) 実測図 (S=1/40)	50
第47図	SK01 実測図 (S=1/40)	51
第48図	SK02 実測図 (S=1/40)	51

第49図	SK02 出土遺物実測図 (S=1/3)	52
第50図	SK04 実測図 (S=1/40)	52
第51図	SK04 出土遺物実測図 (75はS=1/4、その他はS=1/3)	53
第52図	SX01 実測図 (S=1/60)	54
第53図	その他の出土遺物実測図 (S=1/3)	55
第54図	御陵遺跡第2～5次調査からみた土地利用の時代推移	60
第55図	ヒケシマ遺跡第3次調査区の位置図 (S=1/5,000)	61
第56図	ヒケシマ遺跡第3次調査遺構配置図 (S=1/75)	62
第57図	調査区北壁土層図 (S=1/75)	62
第58図	SK01 実測図 (S=1/40)	63
第59図	ヒケシマ遺跡第3次調査出土遺物実測図 (80はS=1/2、その他はS=1/3)	64
第60図	ヒケシマ遺跡と周辺遺跡の位置 (S=1/12,000)	66

表 目 次

表1	御陵遺跡第2次調査出土遺物観察表	56
表2	御陵遺跡第3次調査出土遺物観察表①	56
表3	御陵遺跡第3次調査出土遺物観察表②	57
表4	御陵遺跡第3次調査出土遺物観察表③	58
表5	御陵遺跡第4次調査出土遺物観察表	58
表6	御陵遺跡第5次調査出土遺物観察表	58
表7	ヒケシマ遺跡第3次調査出土遺物観察表	65

図 版 目 次

図版1 (1) 御陵遺跡第2次調査区遠景 (北西から)	(5) SP01 根石出土状況
(2) 御陵遺跡第2次調査区近景 (北から)	(6) SP04 根石出土状況
(3) 御陵遺跡第2次調査区全景 (北から)	(7) SP05 根石出土状況
	(8) SP09 礫出土状況
図版2 (1) SK01 埋土中遺物出土状況 (西から)	図版3 (1) 御陵遺跡第3次調査1区全景 (東より)
(2) SK01 完掘状況 (西から)	(2) 御陵遺跡第3次調査2区全景 (西より)
(3) SD01 (3-4区間) 土層堆積状況 (南から)	図版4 (1) SC01 周辺近景 (南から)
(4) SD03 (1-2区間) 土層堆積状況 (南から)	(2) SC01 遺物出土状況 (南から)
	(3) SC01 土層堆積状況 (東から)
	図版5 (1) SC01 内 SK10 炭化物出土状況 (南西から)

- (2) SC02 ビット検出状況 (西から)
(3) SC02 完掘状況 (東から)
- 図版 6 (1) SX07 - SB01
(2) SX07 - SB02
(3) SX08 全景
- 図版 7 (1) SB01 - SP06
(2) SX07 - SD02 土層堆積状況
(南西から)
(3) SX07 - SD02、03 土層堆積状況
(南西から)
- 図版 8 (1) 1号(奥)、2号石蓋土坑墓(手前)
検出状況 (南西から)
(2) 1号石蓋土坑墓検出状況
(北東から)
(3) 1号石蓋土坑墓遺物出土状況
(東から)
- 図版 9 (1) 1号石蓋土坑墓完掘状況
(北西から)
(2) 2号石蓋土坑墓検出状況
(北西から)
(3) 2号石蓋土坑墓完掘状況 (西から)
- 図版 10 (1) SK04 完掘状況 (東から)
(2) SK06 土層堆積状況 (西から)
(3) SK09 完掘状況 (西から)
(4) SK13 上層土器出土状況 (北から)
(5) SK14 完掘状況 (北から)
(6) SX02 遺物出土状況 (東から)
(7) SX04 遺物出土状況 (西から)
(8) SX05 遺物出土状況 (東から)
- 図版 11 (1) 御陵遺跡第4次調査区遠景
(南から)
(2) 御陵遺跡第4次調査区北部
SD01 周辺 (南から)
(3) 御陵遺跡第4次調査区南部
SK01 周辺 (北西から)
- 図版 12 (1) SK01 検出状況 (北から)
(2) SK01 土層堆積状況 (東から)
(3) SK02 全景 (南から)
- 図版 13 (1) SD04 (北西から)
(2) SD04 (4-5区間)
土層堆積状況 (西から)
(3) 調査区南隣地マウンド状地形
(北から)
- 図版 14 (1) 御陵遺跡第5次調査区 (西より)
(2) 御陵遺跡第5次調査区 (東より)
- 図版 15 (1) SC01 完掘状況 (北東から)
(2) SC02 土層堆積状況 (東から)
(3) SC02 完掘状況 (北から)
- 図版 16 (1) マウンド検出状況 (東から)
(2) SK03 蓋石検出状況 (南西から)
(3) SK03 完掘状況 (西から)
- 図版 17 (1) SK03 埋土堆積状況 (南西から)
(2) SK03 蓋石上縦断面 (西から)
(3) SK03 蓋石除去後縦断面 (西から)
- 図版 18 (1) SK01 土層堆積状況 (南から)
(2) SK01 完掘状況 (北東から)
(3) SK04 土層堆積状況 (南から)
- 図版 19 (1) SK04 炭化物出土状況
(2) SK04 炭化物下層断面
(3) SK04 炭化物層遺物出土状況
- 図版 20 御陵遺跡第2~5次調査出土遺物 1
図版 21 御陵遺跡第2~5次調査出土遺物 2
図版 22 御陵遺跡第2~5次調査出土遺物 3
図版 23 (1) ヒケシマ遺跡第3次調査区全景
(北西より)
(2) ヒケシマ遺跡第3次調査区全景
(東より)
(3) 調査区北壁土層 (南東より)
- 図版 24 (1) SK01 (東より)
(2) SX03 (南東から)
(3) ヒケシマ遺跡第3次調査出土遺物

I. はじめに

1. 調査体制

(1) 平成 17 (2005) 年度 御陵遺跡第2次調査の体制

大野城市教育委員会

教育長	古賀 宮太				
教育部長	小嶋 健				
社会教育課長	水野 邦夫				
文化財担当係長	舟山 良一				
主査	徳本 洋一	石木 秀啓	丸尾 博恵	緒方 一幹	
	林 潤也	早瀬 賢			
嘱託	一瀬 智(～7月)	井上 愛子	西堂 将夫		
	北川 貴洋	栗津 剛史			

(2) 平成 18 (2006) 年度 御陵遺跡第3、4次調査の体制

大野城市教育委員会

教育長	古賀 宮太				
教育部長	小嶋 健				
ふるさと文化財課長	舟山 良一				
文化財担当係長	中山 宏				
主査等	石木 秀啓	徳本 洋一	丸尾 博恵		
	林 潤也	早瀬 賢			
嘱託	井上 愛子	北川 貴洋	城門 義廣		
	岡田 裕之				

(3) 平成 20 (2008) 年度 御陵遺跡第5次調査の体制

大野城市教育委員会

教育長	古賀 宮太				
教育部長	森岡 勉				
ふるさと文化財課長	舟山 良一				
文化財担当係長	中山 宏				
主査等	石木 秀啓	徳本 洋一	丸尾 博恵		
	林 潤也	早瀬 賢	上田 龍児		
嘱託	石川 健	遠藤 茜	大里 弥生		
	甲斐 康大	中島 圭			

(4) 平成 19 (2007) 年度 ヒケシマ遺跡第3次調査の体制

大野城市教育委員会

教育長	古賀 宮太			
教育部長	小嶋 健			
ふるさと文化財課長	舟山 良一			
文化財担当係長	中山 宏			
主 査	徳本 洋一	石木 秀啓	丸尾 博恵	
主任技師	林 潤也	早瀬 賢		
技 師	上田 龍児			
嘱 託	石川 健 (7月～)	井上 愛子	遠藤 茜	
	大里 弥生 (10月～)	城門 義廣 (～8月)		
	田尻 義了 (～6月)	能塚 由紀		

(5) 令和6 (2024) 年度の整理・報告作業体制

市 長	井本 宗司			
地域創造部長	日野 和弘			
大野城心のふるさと館				
館 長	赤司 善彦			
文化財担当課長	石木 秀啓			
係 長	林 潤也	早瀬 賢		
主任主事	下川 みお			
主任技師	龍 友紀	山元 瞭平		
会計年度任用職員	澤田 康夫	石川 健	山村 智子	深町 美佳
	尾川 絢香	慶田 芳一 (10月から)	丹 宣幸 (9月まで)	
	藤田 香	井之口 彩子	西村 恭子	
	仲村 美幸	小嶋 のり子	津田 りえ	松本 友里江
	氷室 優	古賀 栄子	篠田 千恵子	小畑 貴子
	眞田 萌世			

Ⅱ. 位置と環境

大野城市は福岡平野の南に位置し、南北に細長く中央部でくびれた形をしている。地形は北東部に三郡山塊周縁部の井野山、乙金山、王城山が連なる。また、三郡山塊・宝満山を源とする御笠川が市域中央部を北西に流れ牛頭川と合流した後、博多湾に注ぐ。この御笠川右岸の丘陵上に御陵遺跡が広がる。一方、ヒケシマ遺跡は御陵遺跡の位置する丘陵の南側の平野部に位置する。

遺跡周辺の様相をみると、旧石器時代は釜蓋原遺跡・雉子ケ尾遺跡・松葉園遺跡など市北部や出口遺跡・横峰遺跡などで遺物が確認されており、北部の乙金山・大城山や南部の牛頭山からのびる丘陵地帯が主たる生活の場であったことがわかる。

縄文時代では、草創期の遺跡は市内で確認されていないが、早期には乙金山・四王寺山麓の薬師の森遺跡、雉子ケ尾遺跡、釜蓋原遺跡等で押型文土器が出土するほか、平野微高地上にも石勺遺跡が分布する。平野部微高地上での活動の痕跡がみられ、活動範囲が徐々に広がっている。

弥生時代には市東北部の御陵前ノ椽遺跡や塚口遺跡、中・寺尾遺跡で前期の甕棺墓・土坑墓・木棺墓が調査されており、市南部丘陵地でも前期後半の墓地在調査されている。集落跡は川原遺跡、仲島本間尺遺跡や薬師の森遺跡などで確認されている。前期末頃には石勺遺跡など平野部で集落遺跡が増加する。これらの遺跡は中期を通じて営まれるが、石勺遺跡や瑞穂遺跡では墓地もみられる。市東北部の中・寺尾遺跡や森園遺跡でも集落と墓地が形成される。後期には市東北部や平野部の遺跡で中期以降継続して集落が営まれるほか、榎町遺跡や村下遺跡など新たな集落もみられる。

古墳時代には福岡平野や那珂川流域を中心に首長墓級の前方後円墳が分布する。市域では明確な前方後円墳は確認されていないが、御陵古墳群で小円墳群が築かれる。集落は仲島遺跡や石勺遺跡、村下遺跡などの弥生時代後期以来の遺跡に加え、瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡で確認される。中期は5世紀前半の笹原古墳の築造後、5世紀後半には古野古墳群等で群集墳の形成が始まる。集落遺跡は仲島遺跡、石勺遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡等で確認されている。6世紀後半以降は群集墳が急増するが、市域でも月隈丘陵から乙金山山麓に善一田古墳群、王城山古墳群などが築造される。集落は仲島遺跡の他、薬師の森遺跡などで確認される。このうち仲島遺跡は、集落規模が大きく多数の掘立柱建物で確認されており拠点的な集落と考えられる。6世紀中頃に降牛頭麻跡群で須恵器生産が行われるが、乙金・四王寺山麓でも須恵器生産が始まり、薬師の森遺跡では鉄器や須恵器生産に関わる集落が形成される。その後7世紀中頃から後半にかけて市域で遺構や遺物の減少がみられる。

飛鳥・奈良時代に入ると、大宰府が成立し水城東西両門から官道がのびるが、井相田C遺跡、谷川遺跡などで官道側溝、池ノ上遺跡・御供田遺跡で盛土状遺構や土橋状遺構などが確認されている。また、市中央部畑ノ原遺跡等で集落が営まれる。9世紀になると周辺では集落が減少し、仲島遺跡も含め御笠川周辺の集落の多くがこの頃に廃絶する。また牛頭麻跡群も生産が衰退・終了に向かう。その後、本堂遺跡群や上園遺跡周辺で10・11世紀代に集落形成が活発になり、宝松遺跡、御笠の森遺跡などで11世紀以降集落が形成され、御笠の森遺跡では近世まで遺跡が継続する。



福岡市

1. 持田ヶ浦古墳群A群
2. 持田ヶ浦古墳群B群
3. 持田ヶ浦古墳群C群
4. 持田ヶ浦古墳群D群
5. 持田ヶ浦古墳群E群
6. 持田ヶ浦古墳群F群
7. 今里不動古墳
8. 堤ヶ浦古墳群
9. 影ヶ浦遺跡
10. 金原遺跡群
11. 井相田B遺跡群
12. 井相田D遺跡群
13. 井相田C遺跡群
14. 夷野A遺跡
15. 夷野C遺跡
16. 南八幡遺跡群
17. 雄略原遺跡群

大野城市

18. 唐山古墳群
19. 乙金北古墳群

20. 唐山遺跡
21. 豊陵遺跡
22. 御陵脇遺跡
23. 塚口遺跡
24. 御陵前ノ塚遺跡
25. 善一田遺跡・古墳群
26. 壬城山遺跡・古墳群
27. 古野遺跡・古墳群
28. 原口遺跡・古墳群
29. 乙金南遺跡群
30. 此岡古墳群
31. 松葉園遺跡
32. 森園遺跡
33. ヒケシマ遺跡
34. 中ノ寺尾遺跡
35. 花園遺跡
36. 栗師の森遺跡
37. 龜山遺跡
38. 新門遺跡
39. 鎌子ヶ尾遺跡

40. 鎌子ヶ尾宮跡
41. 鎌子ヶ尾古墳
42. 釜蓋原古墳群
43. 牧原古墳
44. 金山遺跡
45. 釜蓋原遺跡
46. 仲島遺跡
47. 仲島本間尺遺跡
48. 川原遺跡
49. 御笠の森遺跡
50. 宝松遺跡
51. 村下遺跡
52. 雄略原遺跡
53. 石勾遺跡
54. 原ノ畑遺跡
55. 後原遺跡
56. 御供田遺跡
57. 堀越遺跡
58. 岡分田遺跡
59. 古賀遺跡

太宰府市

60. 成陸形遺跡群
 61. 成陸形古墳群
 62. 裏ノ田宮跡
 63. 裏ノ田古墳
 64. 裏ノ田遺跡
- 春日市
65. 駿河A遺跡
 66. 駿河B遺跡
 67. 駿河D遺跡
 68. 駿河E遺跡
 69. 原ノ口遺跡
 70. 先ノ原遺跡
 71. 立石遺跡
 72. 先ノ原春日公園内遺跡

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

Ⅲ. 御陵遺跡第2～5次調査の結果

1. 調査にいたる経緯

中・乙金東地区は大野城市の東部に位置し、県道60号線や九州自動車道が通り、古代から糟屋郡やその先の筑豊地域など東への交通の重要な位置を占めていた。以下に報告する御陵遺跡第2次から5次調査については第2次調査のみ調査要因が他と異なる。第2次調査は住宅建設に伴う調査であり、大野城市の委託を受け調査を行ったものである。

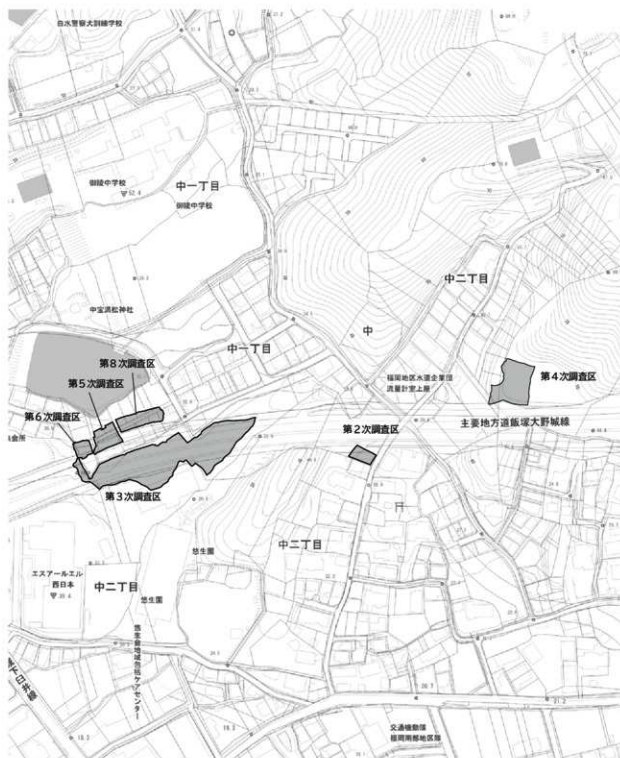
第3次から第5次までの発掘調査の要因は県道飯塚大野城線（那珂川宇美線）の建設であるが、福岡市周辺の交通量の増加による県道60号線の渋滞緩和を図るため以前から計画されていた。これに伴い平成16年度に用地買収が完了した区間について、平成16年5月13日付けで福岡県那珂土木事務所より試掘調査の依頼書が提出され、本市教育委員会社会教育課文化財担当（現心のふるさと館文化財担当）との間で埋蔵文化財の取り扱いについての協議が行われた。6月21日付けで埋蔵文化財試掘調査委託契約書を締結し、用地買収が完了した一部区域において先行して試掘調査を実施することとなり、調査が開始された。平成17年度も平成18年1月17日付けで埋蔵文化財試掘調査委託契約書を締結し、用地買収の完了した一部区間について試掘調査を実施した。平成18年度は本格的な工事を開始したいとの申し入れがあり、さらに前年度の試掘調査の結果を受け本市教育委員会でも本格的な調査に着手する必要性が生じたため、改めて那珂土木事務所と教育委員会ふるさと文化財課（現心のふるさと館文化財担当）との間で埋蔵文化財の取り扱いについての協議がおこなわれ、4月28日付けで「県道飯塚大野城線関連遺跡埋蔵文化財に関する協定書」を、さらに5月8日付けで埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結し、試掘調査に加え本調査を開始した。

2. 第2次調査

(1) 調査概要（第2・3図、図版1）

御陵遺跡第2次調査区は大野城市中2丁目483番1号の一部に位置する。標高は約25mを測る。三角縁神獣鏡が江戸時代に出土したと伝えられる御陵古墳群赤坂支群の位置する丘陵の東隣の丘陵にあたる。調査面積は260㎡である。平成18年3月2日から3月28日にかけて調査を行った。

調査地内は現代の攪乱が著しく、確認できた遺構は必ずしも多くはなかった。調査範囲の西側で溝2条、東半部で土坑1基、ピット10数個を確認した。ピットのうち4基については底面で平石が据えられているのを確認した。出土遺物は、少量の須恵器に加え、陶磁器が出土した。



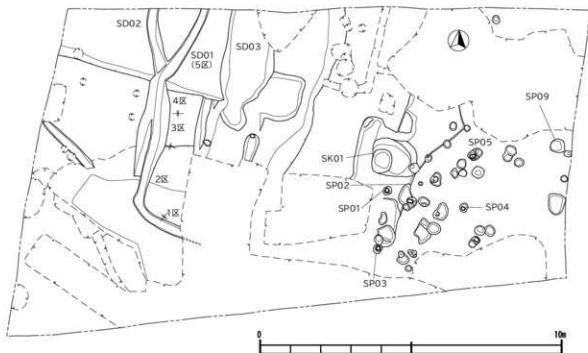
第2図 御陵遺跡第2～5次調査区の位置図 (S=1/3,000)

(2) 遺構と遺物

1) 土坑

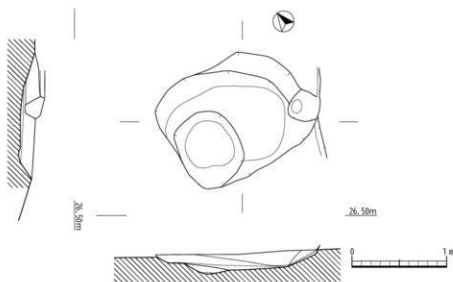
SK01 (第4図、図版2)

調査範囲の中央部やや東よりに位置する。遺構を含め周辺は現代の攪乱を著しくうむっており、



第3図 御陵遺跡第2次調査遺構配置図 (S=1/125)

SK01は底部付近がかるうじて遺存するのみであった。遺構の東側と南西部に別のピットが切り合っているため平面プランはやや不明瞭であるが、長軸を略北西-南東方向にとる長楕円形プランを呈するものと推定される。遺構の



第4図 SK01 実測図 (S=1/40)

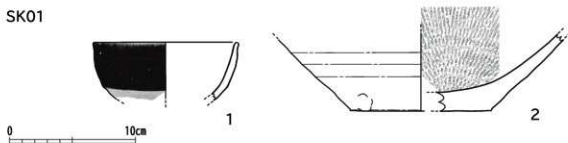
規模は長軸方向で1.8m、短軸方向で最大1.4mである。床面はほぼ平坦で壁面はゆるやかに立ち上がる。遺構検出面からの深さは最大で22cmを測る。

出土遺物 (第5図、図版20)

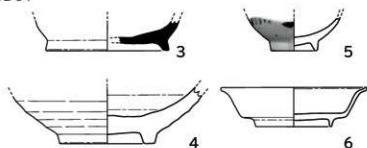
陶器

碗(1) 胴部から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がる天目茶碗である。内外面施釉で釉が厚く掛かるが、胴部下位の外面は露胎である。

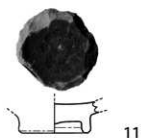
SK01



SD01



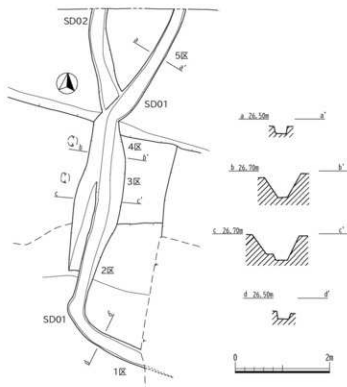
SP09



SD02



第5図 SK01、SD01・03、SP09 出土遺物実測図 (S=1/3)



第6図 SD01 実測図 (S=1/80)

溝鉢 (2) 溝鉢の底部片である。底部外面は回転糸切りである。胴部の下位に胎土目が見られる。ロクロ成形で、内外面とも残存部は無釉である。内面は使用によって若干摩耗している。

2) 溝

SD01 (第6図、図版2)

調査区の西側に位置し、SD03とは北壁部分で2.7mほどの距離にある。溝は北壁から南西方向へ2.7mほど向かい、南に4.0mほどのびる。そのうち南東方向へ1.6mほど向かうが、その東側は攪乱によって消失している。溝幅は調査区北壁で、24cm、SD01 - 3区中央部で最大幅98cmを測る。

SD01-1区では34cmである。断面は逆台形を呈する。

溝床面の深さは、北壁部で遺構検出面から18.5cmである。溝が南北方向に走るb-b'間では最大50cm、c-c'間で最大54cmの深さを測る。溝が南東方向に走る部分ではd-d'間で16.5cmである。溝床面の標高は、北壁部で26.2m、SD01-5区から2区の間で26.1～26.2mでほぼ平坦であるが、1区では東端部で26.05mとやや低くなる。

出土遺物（第5図、図版20）

須恵器

杯（3）杯B身の底部片である。底部から体部がゆるやかに立ち上がる。外に向くしっかりした高台が底部外端につく。

陶器

大皿（4）大皿の底部片である。高台から胴部がゆるやかに立ち上がる。残存部は外面無釉で、内面は薄く釉が掛かる。

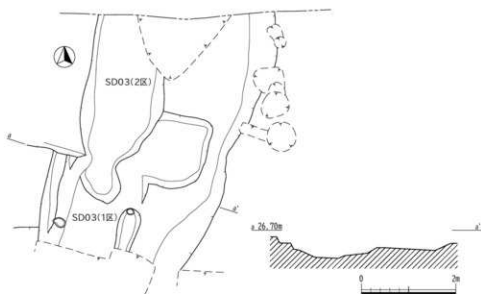
磁器

碗（5）染付碗である。胴部上半から口縁部を欠損する。高台疊付釉剥ぎで、胴部に木賊を描く。肥前産であろう。

皿（6）直立する高台が底部やや内側につく。底部から屈曲してやや外に開く体部がつき、口縁部は鏝縁状で端部は口鏝である。

SD03（第7図、図版2）

調査区中央やや西よりで、SD01の東側に位置する。ほぼ南北方向に流れる溝状遺構であるが、溝北側は調査区外に延びる。また、南側は攪乱によって消失している。残存部分中央よりやや南側に床面に段がみられる。溝幅は、北壁部分で3.8m、南端部分で3.1mを測る。



第7図 SD03 実測図 (S=1/80)

出土遺物（第5図、図版20）

須恵器

杯（7・8）7は杯B蓋の口縁部で下方に短く折れる。8は杯Bの身の底部から体部下半の破片である。直立する高台が短くつく。底部と体部の境は明瞭である。

磁器

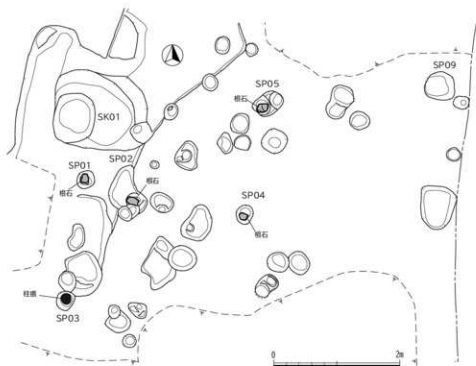
碗（9）染付の筒形碗である。胴部上半から口縁部を欠く。高台畳付釉剥ぎで、高台の基部に櫛歯文、胴部に七宝文を描く。

皿（10）皿で浅く立ち上がる胴部に外反する口縁部がつく。内外面とも施釉するが、体部外面下半は露胎である。

3) ビット

根石検出ビット（第8図、図版2）

2次調査区の東部ではビットが複数確認されている。なかには柱穴の底面に根石と考えられる平石が据えられているビットも確認できた。これらのビットはSP01、02、04、05である。また、SP03では柱痕が確認された。これらのビットの分布から建物跡の復元は難しく、また柱穴底面のレベルも一定しない。ただし、柱痕が認められ、柱の根石が複数確認されていることから、この範囲に何らかの施設が存在したものと推定できる。これらのビットからは根石や柱痕以外に陶磁器の細片が出土しているが、実測は不可能であった。



第8図 根石、柱痕検出ビット平面図（S=1/60）

ピット出土遺物

SP09 出土遺物（第5図）

磁器

碗（11）青磁碗の底部である。見込みに花文が施されている。

（3）小結

本調査区では現代の攪乱が著しく、確認できた遺構は必ずしも多くはない。しかし、溝2条、土坑1基、ピット複数を確認した。出土遺物も多くはないが、8世紀代の須恵器に加え、中世の輸入青磁、近世陶磁器が出土した。

SK01は削平がひどく床面付近のみ残存するものであったが、天目碗に加え、陶器の擂鉢が出土した。これらの遺物から近世の遺構と考えられる。

SD01は調査区北辺から途中若干流路が折れるが、北東ないしは北から南に向かった後、東にL字状に屈曲する。東側にどの程度伸びるのかなど詳細は攪乱のため不明である。遺構の時期は須恵器が混在するが、近世の陶磁器が出土しており江戸期の所産であろう。SD03についても同様である。

調査区の東部で比較的まとまって確認されたピット群のうち、少なくともその一部からは報告こそできなかったが近世陶磁器の細片が出土しており、江戸期の所産と考えることができるであろう。

17世紀初頭をさかいにそれまでの辺りは御笠川対岸も含めた山田村の一部として把握されていたが、その後、御笠川左岸の山田村、筒井村、御笠川右岸の中村として把握されるようになる。御陵遺跡の所在する地域はこのうち中村の範囲に含まれる。このような近世村落の動態・展開の一部を考えるうえでも、今回の調査結果は貴重な成果といえるであろう。近年、御笠川対岸の御笠の森遺跡や村下遺跡、雑飼隈遺跡等で中世から近世にかけての村落の様相が明らかにされつつある。今後も、周辺の調査が進むことで近世の当地域の様相が明らかにされることが期待される。

3. 第3次調査

(1) 調査概要(第2・9図、図版3)

御陵遺跡第3次調査区は、大野城市中2丁目899-8、899-9に所在する。福岡平野東部の月隈丘陵西側斜面から西南にのびた低丘陵の頂部および南向き斜面に立地する。調査面積は4,100㎡で、平成18年5月9日から10月24日にかけて調査を行った。

調査の結果、竪穴状遺構2基、貯蔵穴1基、石蓋土坑墓2基、掘立柱建物3棟、土坑多数、ビット少数が確認された。遺物は弥生土器、石器、須恵器、鉄器などが出土した。

(2) 遺構と遺物

1) 竪穴状遺構

SC01(第10図、図版4・5)

3次調査区1区のほぼ中央に位置する。遺構の南部は攪乱によって破壊されているが、円形プランの住居跡である。東西方向は最大5.0m、南北方向は最大3.6mを測る。遺構検出面から床面までは最大で深さ75cm程残存する。床面は東西方向で西側半分がややすり鉢状を呈しており、南北方向では南に向かってわずかに傾斜する。

また、北壁東半部と東壁北半部に沿って壁溝が残存する。北壁沿いの壁溝は床面からの深さは最大で7.5cm、東壁沿いの壁溝は床面から最大6.5cmの深さを測る。住居跡の四隅に近いところにそれぞれ柱穴と推定されるビットが確認できる。住居北東隅の柱穴の深さは床面から53cm、北西隅の柱穴は44cm、南西隅の柱穴は24cm、東南隅で26cmの深さを測る。これらの柱穴底面のレベルはいずれも31.5mでほぼ同じレベルである。

SC01のほぼ中央部にSK10が位置する。SK01は炭化物を多く含む層が堆積しており、SC01に伴う施設の可能性が高い。土坑の平面は不整形を呈している。遺構の規模は、南北方向で最大78cm、東西方向で73cmを測る。土坑の深さは検出面から25cmを測る。床面は遺構中央部がややくぼむがほぼ平らである。

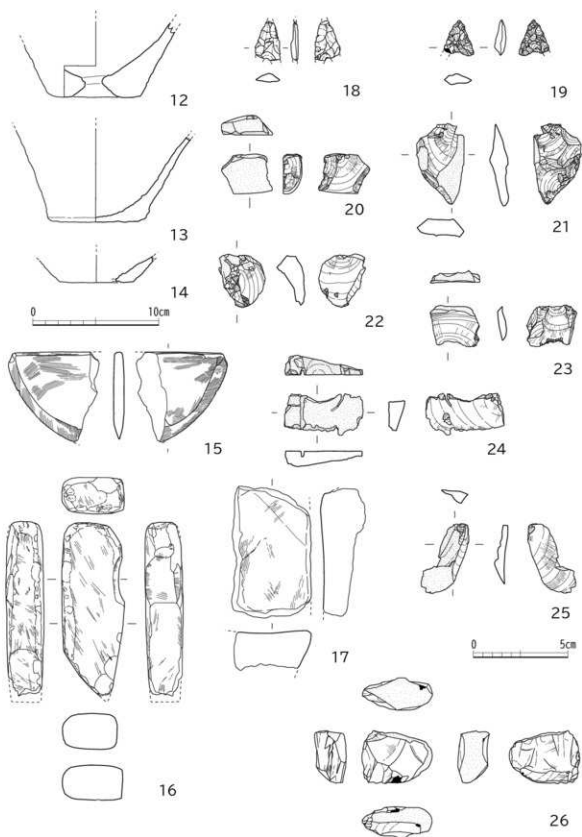
また、床面ではこのほかに北壁中央部付近で炭化物の分布が確認された。ただし、この範囲で炉と考えられるビット等は確認できなかった。以下の遺物の他に炭化物や炭化材が出土している。

出土遺物(第11図、図版20)

弥生土器

甕(12・13) 12は甕の底部である。底部は厚く1.8cm程を測る。底部中央には内面から穿孔が施される。13も甕の底部で、底部は薄い平底である。器面の荒れが著しく調整など詳細は不明である。底径は7.6cmである。

壺(14) 壺の底部片である。器面の劣化が著しく調整など詳細は不明である。底径は6.0cmに復元できる。



第11図 SC01 (SX01) 出土遺物実測図 (18～25はS=1/2、その他はS=1/3)

残存しており、無茎凹基式である。先端部も欠損する。断面が凸レンズ状を呈している。重量は1.0gである。19はSC01内のSK10埋土中出土の黒曜石製の石鏃である。基部に浅い抉りが入る凹基式で、基部の片方が一部欠損する。表裏面とも部分的に風化面が残る。最大長1.9cm、幅1.58cm、最大厚5.0mm、重量1.1gである。

石錐・ドリル(20) 自然面を残す厚い剥片の側縁に微細な剥離を複数確認でき、先端部を鋭利に加工している。この先端は一部つぶれたような状態である。このような特徴から石錐の可能性がある。黒曜石製で比較的良質な石材である。

剥片(21～23) 21は二次加工の見られる剥片で、上端部に微細な二次加工が施される。石材は黒曜石で、流理構造のため黒色とやや白色を帯びた縞状を呈する。22は黒曜石の剥片で、自然面が一部残る。重量6.0g。23も二次加工剥片である。一部自然面が残る剥片の一边に微細剥離を連続して施す。

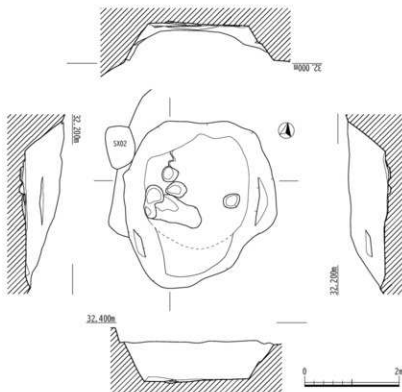
碎片・細片(24・25) 24は黒曜石のチップであろう。剥離面1面以外は自然面である。重量は7.2gである。25も黒曜石のチップである。裏面の主要剥離面に加え、表面にも複数箇所剥離痕が確認できるが、そのほかは自然面を残す。重量2.8gである。

石核(26) 安山岩の石核である。自然面が3面残るが、そのほかの面は剥離痕が複数みられる。

SC02(第12図、図版5)

SC01の下位で検出された遺構で、SC01の中央から西側にかけての部分と重複する。南北方向を長軸とする円形に近い形の竪穴状遺構である。竪穴の規模は、南北方向で最大3.5m、東西方向で3.26mを測る。SC01床面から本遺構の床面までの深さは最大85.6cmを測る。

床面西側で深さ10cm以下の浅いピットが確認されるが、東側はおおむね平坦である。壁はやや傾斜



第12図 SC02実測図(S=1/80)

して立ち上がる。床面西側でピットが複数確認されているが、柱穴や炉跡は不明である。炭化材が出土しているが、その他に遺物は出土していない。

2) 掘立柱建物

SB01 (第13図、図版6・7)

掘立柱建物は3棟を復元できたが、いずれも3次調査区2区に位置する。3棟の掘立柱建物はいずれも、後述する2区傾斜面に形成された2段の平坦面であるSX07、08内に分布する。SB01は上段の平坦面の最も西側に位置する。桁行を北東-南西方向にとる建物跡で、北西側の標高の高い側で桁行3間、南東側で2間分が確認された。梁間は東西で1間と推定されるが、桁行と直交せずいずれも斜交し南東側にすばまるような形状を呈する。そのため柱の配置から想定される建物は長辺を傾斜地の標高の高い方に向けた逆台形状を呈する。建物規模は、桁行が北側6.3m、南側5.0m、梁間は東側で1.6m、西側1.9mを測る。

柱穴の規模は、SB01-03とSB01-05が桁行・梁間方向ともに30～35cm、SP01とSB01-07が桁行・梁間方向とともに48～50cm程度、38～40cmと近似した規模である。SB01-02、SB01-04、SP06は桁行方向49～60cm、梁間方向56～68cmでSB01の柱穴のうちでは最も大きな規模となる。柱穴の遺構検出面からの深さは、SP01が80cm、SB01-07が78cmと深く、SB01-04が50.5cm、SP06が57.6cm、SB01-05が41cm、SB01-02が37cm、SB01-03が24cmを測る。遺物は出土していない。

SB02 (第13図、図版6)

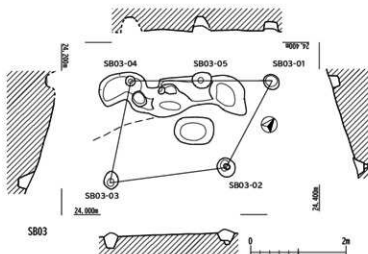
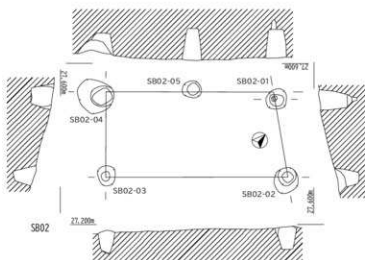
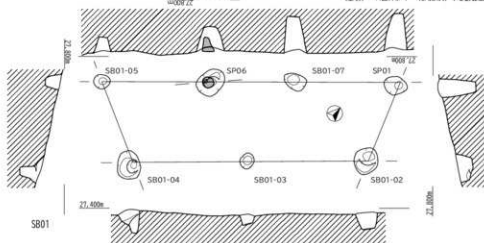
SB02は上段の平坦面の西側、SB01の東側に隣接する。桁行方向を北東-南西方向にとる建物跡であり、SB01と桁行方向がほぼ同じである。北西側の標高の高い側で桁行2間、南東側で1間分が確認された。梁間は東西で1間と推定されるが、東側の梁間は桁行と直交せずやや斜交し南東側に若干広がる。柱の配置から想定される建物は長辺を傾斜地の標高の低い方に向けるものの、略長方形を呈する。建物規模は、桁行が北側3.6m、南側3.9m、梁間は東側で1.7m、西側1.8mを測る。

柱穴の規模は、SB02-01、SB02-03、SB02-05が桁行方向38～44cm、梁間方向で36～43cmとこの建物の柱穴群の中では小規模な一群である。SB02-02はこれらより若干掘方の規模が大きく、桁行方向50cm、梁間方向55cm程を測る。SB02-04は最も規模の大きな柱穴で、桁行方向77.4cm、梁間方向74cmを測る。柱穴の深さはSB02-01が最も深く81cmを測り、SB02-02が49.5cmと最も浅い。SB02-03やSB02-04もほぼ同じ深さで50cmから54cm程の深さを測る。遺物は出土していない。

SB03 (第13図、図版6)

SB03はSB01・02より一段低い平坦面であるSX08内の西部に位置する。桁行方向を略北東-南西方向にとる建物跡で1間×1間が確認された。東側の梁間は桁行と直交せず南西側に斜行し、南側の桁行がやや短くなる。建物規模は、桁行が北側2.9m、南側2.5m、梁間は東側で2.0m、西側2.2mを測る。

柱穴の規模は、SB03-04が最も小規模で桁行方向、梁間方向ともに20cmを測る。その他のSB03-01、SB03-02、SB03-03、SB03-05は桁行方向、梁間方向ともに30～40cm程を測る。柱穴の深さはSB03-04が3.0cmと後世の削平によって極端に浅い。SB03-01は23cmを測り、その他のSB03-02、SB03-02、SB03-05は31～32.5cm程を測る。遺物は出土していない。



A horizontal number line is shown with endpoints labeled 0 and 2. There are 20 equal tick marks between 0 and 2, representing intervals of 0.1. A point is marked with a dot at the 5th tick mark after 0, which corresponds to the value 0.5.

3) 石蓋土坑墓

1号石蓋土坑墓 (SK01) (第14図、図版8・9)

遺構は第3次調査1区の西部丘陵尾根上に位置する。南西方向約7.5mの標高がやや低いところには、主軸をほぼ同じくする2号石蓋土坑墓が位置する。

墓坑の南西部上面には蓋石である平石が1個残存するが、その上面は墓坑中心に向かって傾斜しており、その他の部分には蓋石は残存しない。ただし、墓坑内に堆積する2層には礫が複数含まれている。これらは、次に報告する2号石蓋土坑墓の蓋石の構造などから、大形の蓋石間に据えた小礫が崩落したものと推定される。

平面形は北西部分と南西部分でやや明瞭さに欠くが、北東-南西方向に長軸をとる長方形プランを呈するものと推定される。また、遺構の断面からは、南西部の端部および北辺部で浅い段状の掘り込みがみられ、ともに墓坑底に堆積する3層と類似した4層が堆積している。そのため、墓坑の西側部分是一段テラス状の構造が設けられていた可能性がうかがわれる。遺構の規模は長軸方向で1.55m、それと直交する北西-南東方向で最大幅0.93mを測る。墓坑西部の一段浅い部分の深さは8cmである。墓坑底の深さは、遺構検出面から最大で41cmを測る。墓坑底はほぼ平坦であるが、墓坑の北西側壁面の立ち上がりは不明である。一方、墓坑の北東側小口部はほぼ垂直に立ち上がる。以下に示す遺物の他に、磨石小片や弥生土器の細片が出土しているが、資料化できなかった。また、刀子が3層上面から出土したが、遺物が散逸しており今回報告するには至らなかった。

出土遺物 (第15図)

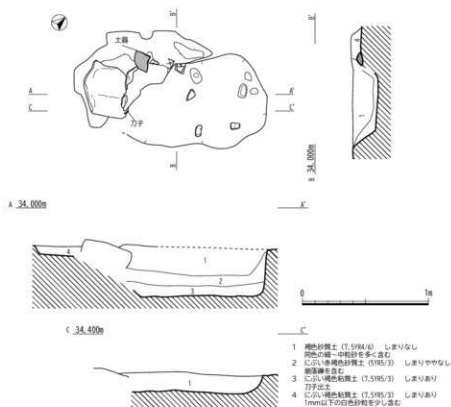
石製品

剥片(27) 黒曜石片で、1面に剥離加工を繰り返し行った痕跡がみられ、残り4面は自然面のままである。

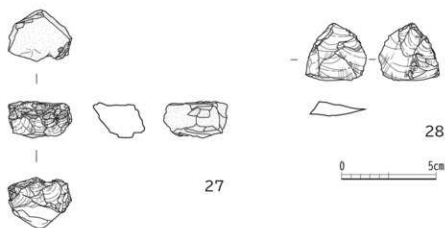
2号石蓋土坑墓 (SK02) (第16図、図版9)

第3次調査1区北東部からのびる尾根先端部の南側傾斜地付近に位置する。墓坑上面は6個の大形の蓋石によっておおわれており、これら大形蓋石の間に小礫が詰められた状態である。蓋石の上面は墓坑中央部に向かってやや低くくぼんだ状態で、墓坑北東側小口近くの2石は墓坑内に陥落しているが、おおむね平坦な状態を保持する。しかし、南東部小口から3つめの蓋石や墓坑内に崩落している北東部の小口から2つめの蓋石などは墓坑北西側長辺に向かって大きく傾く。また、本来蓋石間の上面に敷きこまれていたと推定される小礫が複数墓坑内に崩落している。蓋石は墓坑内に崩落している北東部の2石以外はほぼ長さがそろっており、2段に掘られた墓坑の浅い肩にかかるように架けられる。

墓坑の形態は長軸を北東-南西方向にとる長方形を呈する。墓坑の構造は四周を一段浅くテラス状に掘り、そこから墓坑をさらに深く掘る。墓坑の規模はテラス状の浅い掘り込みも含めると長軸方向で2.4m、北西-南東方向で最大幅1.3mを測る。墓坑の規模は、長軸方向で2.18m、短軸方向で最大0.73mを測る。浅いテラス部分の深さが2~6cm程で、墓坑底までは遺構検出面から最大で60cmである。墓坑底面は墓坑の南西部分でやや浅くすり鉢状にくぼみ、墓坑中央部がわずかに高くなる。一方墓坑の北東部分は北東側小口部からなだらかに墓坑中央部に向かって低くなる。



第14図 1号石蓋土坑墓 (SK01) 実測図 (S=1/30)



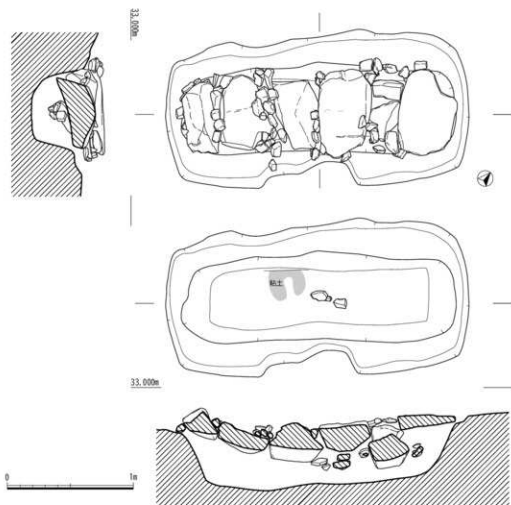
第15図 1号 (SK01)、2号石蓋土坑墓 (SK02) 出土遺物実測図 (S=1/2)

墓坑内から副葬品は出土していないが、墓坑中央部北西壁寄りから粘土が確認されている。以下に示す埋土から出土したものの他に遺物は出土しなかった。

出土遺物 (第15図)

石製品

剥片 (28) 遺構検出時に出土した黒曜石の剥片である。一部風化面が残る。重量 6.6g である。



第16図 2号石蓋土坑墓 (SK02) 実測図 (S=1/30)

4) 土坑

SK03 (第17図)

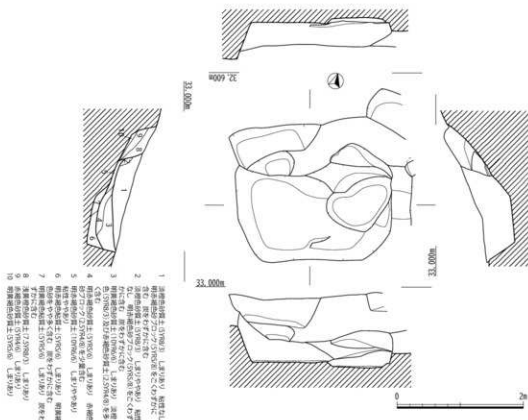
SK03は3次調査1区のほぼ中央部、後述のSK04・05など尾根縁部部に分布する遺構の南側の傾斜地に位置する。本土坑は土層断面図から複数回、最大4回ほどの掘削が繰り返されており、複数基の土坑が重複している。そのため、各土坑のプランは不明である。以下、北側壁面を中心に失われているが、当初に掘削された土坑について記載する。

土坑は東西方向を長軸とする略方形プランを呈する。遺構の規模は長軸方向で2.5m、南北方向で1.6mを測る。遺構の深さは遺構検出面から最大84cmを測る。床面は、等高線にほぼ沿う長軸方向では平坦だが、斜面に沿った南北方向では南に向かってやや低く傾斜する。以下の出土遺物の他に弥生土器の小品が遺構埋土層より出土するが、資料化はできなかった。

出土遺物 (第18図、図版20)

弥生土器

甕 (29) 甕の底部片である。底部外面は丁寧なナデで、胴部は縦方向のハケメである。内面は器面の



第17図 SK03 実測図 (S=1/60)

荒れが著しく不明瞭であるが、ナデであろう。底径は8.8 cmに復元できる。

石製品

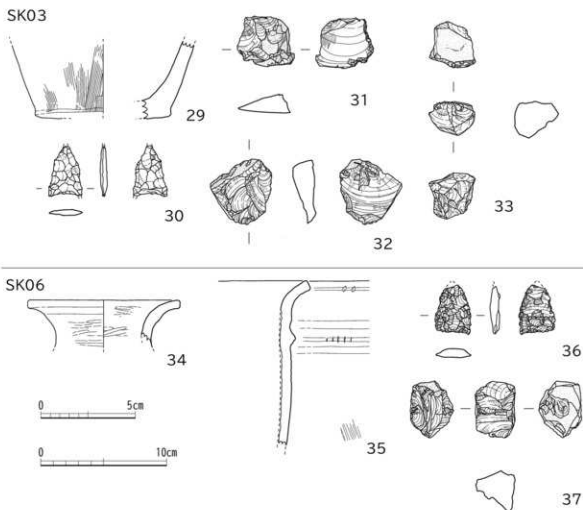
石鏃(30) 凹基式有肩の打製石鏃である。先端部を欠損するがほぼ完形に近い。安山岩製で、重量は1.3gである。

剥片(31・32) 31は自然面を残す剥片で、1辺に微細剥離痕がみられる。黒曜石製、重量は7.2gである。32は自然面が一部残る黒曜石の剥片である。表裏ともに複数の剥離痕がみられる。掻器であろう。重量は11.0gである。

石核(33) 黒曜石の石核である。自然面が2面残る。剥離面のうち2面はやや風化が進んでいる。重量は9.1gである。

SK04 (第19図、図版10)

3次調査1区の中央部北側の傾斜がややゆるやかになる尾根縁辺部に位置する。SK05の北壁と重複する。平面形は、北西-南東方向に長軸をとる長楕円形を呈する。遺構の規模は南北方向で1.7m、東西方向で最大幅1.58mを測る。遺構の床面までの深さは遺構検出面から最大で1.3mを測る。床面は遺構中央部がやや低くなる浅いすり鉢状の形態を呈する。床面には円形を呈するピットが3基確認されており、うち2つが土坑の南北軸に沿ってならぶ。北側のピットの規模は12.8×9.8cmで深さは25cmを測り、南側のピットは13.0×12.2cmで深さ15.2cmを測る。遺物は出土していない。



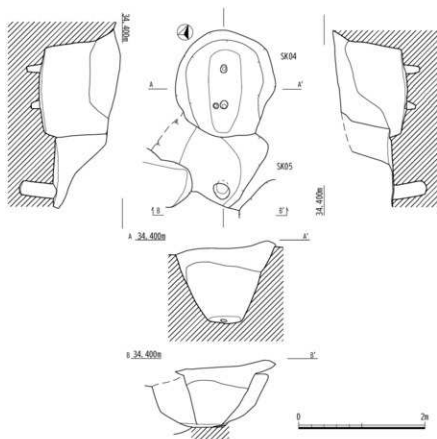
第 18 図 SK03、06 出土遺物実測図 (29、34、35 は $S=1/3$ 、その他は $S=1/2$)

SK05 (第 19 図)

SK05 は SK04 の南壁に重複し、遺構の南側や西側は攪乱などによって消失する。残存部分は遺構の北半部と考えられ、遺構北東隅が残存している。そのため平面形は略南北方向を長軸とする方形ないし長方形プランを呈するものと推定できる。遺構の規模は、南北方向で最大 1.3m が遺存し、東西方向は攪乱のため不明である。遺構検出面から床面までの深さは最大で 84 cm を測る。床面は遺構南側に向かってゆるやかに傾斜するが、ほぼ平坦である。また土坑の東壁近くにビットが 1 基確認された。平面は北西-南東方向にやや長い楕円形を呈する。ビットの規模は 28.0×22.0 cm、深さ 54 cm を測る。遺物は出土しなかった。

SK06 (第 20 図、図版 10)

SK06 は 1 区中央部、SK04・05 の南東側斜面に位置する。主軸を略東西、南北方向にとる方形プランの土坑であるが、遺構の南東隅はやや東側に膨らむ。遺構の規模は南北方向で 1.43m、東西方向で最大 1.58m を測る。遺構の深さは遺構検出面から最大 1.5m を測る。床面はほぼ平坦であるが、西側から東側に向かってゆるやかに傾斜している。床面には浅いビットを 2 基確認できるが、SK06 との関係は不



第19図 SK04、05実測図 (S=1/60)

明である。以下の遺物の他に、詳細不明石片、弥生土器小片が出土した。

出土遺物（第18図、図版20・21）

弥生土器

壺（34）壺の口縁部から頸部にかけての破片である。外湾して立ち上がる頸部からそのまま口縁端部に至る。器面がやや荒れるが、内外面とも横方向のミガキであろう。口径は12.2cmに復元できる。

甕（35）甕の口縁部から胴部にかけての破片である。胴部の張りが弱く、口縁が外反する。口縁部下位に細く浅い刻目の施された突帯が1条めぐり、内面は器面が著しく劣化している。

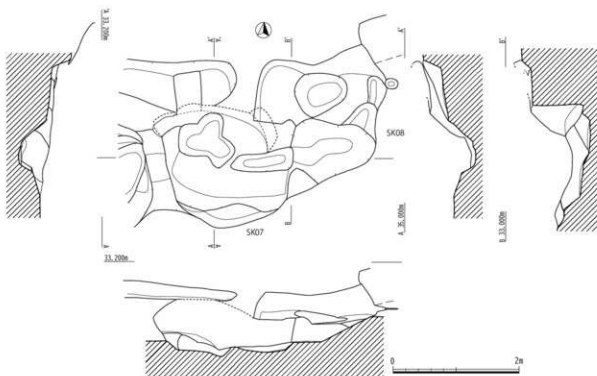
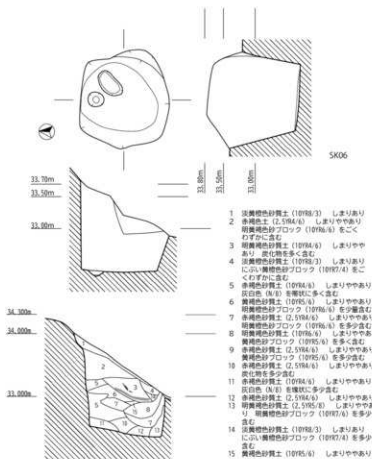
石製品

石鏃（36）黒曜石製の打製石鏃である。平基式で、先端部が欠損する。裏面に主要剥離面が残る。重量は2.2gである。

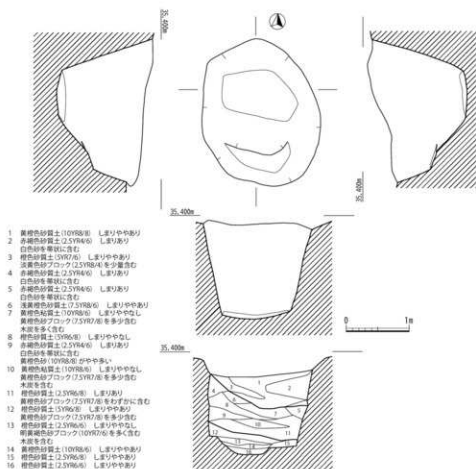
石核（37）黒曜石の石核で、一部自然面が残る。重量は13.2gである。

SK07（第20図）

SK07とその東に隣接するSK08は3次調査Ⅰ区中央部、SK03とSC01の間に位置する。これらの遺構が位置する場所は、東西方向に走る尾根から南側の谷に向かう傾斜面の途中で、傾斜が若干ゆるやかで上下斜面に比べ平坦となっている。このような微地形上の特徴のためか遺構の重複が顕著で、SK07とSK08も残存しているのは遺構の一部である。



第20図 SK06、07、08 実測図 (S=1/60)



第21図 SK09 実測図 (S=1/60)

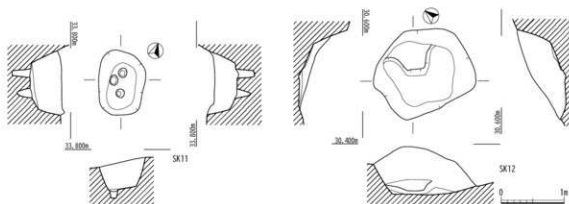
そのためSK07の平面形態は不明瞭であるが、残存部分からおおよそ東西方向に長軸をとる長楕円形あるいは円形に近いプランを呈するものと推定される。遺構の規模は南北方向で2.0m、東西方向で2.2mほどが残存する。深さは44cm程を測る。遺物は出土していない。

SK08 (第20図)

SK08はSK07の東に位置し、土坑の北西隅のみが残存する。平面は北西部残存部から東西方向にやや長い隅丸長方形を呈するものと推測される。遺構の規模は、南北方向1.6m、東西方向2.1mが残存する。遺構の深さは遺構検出面から45cmを測る。一部のみ残存しており他の遺構の重複もあるため床面の状況については不明瞭である。遺物は出土していない。

SK09 (第21図、図版10)

3次調査I区西部北側の緩斜面に位置する。西側5mにSK13が位置する。土坑の平面は南北方向にやや長い楕円形を呈する。遺構の規模は南北方向で2.34m、東西方向で1.9mを測る。土坑の深さは、遺構検出面から最大で1.6mを測る。土坑の南側で床面から58cm程高いところにステップがつく。床面は中央部が窪み浅いすり鉢状を呈する。遺物は出土していない。



第22図 SK11、12実測図 (S=1/60)

SK11 (第22図)

3次調査1区西部の北壁近くに位置する。南西方向2mのところに1号石蓋土坑墓が位置する。平面形はほぼ北西-南東方向に主軸をとり、北西隅がややふくらむ隅丸長方形を呈する。遺構の規模は長軸方向で最大長1.0m、最大幅は0.8mである。遺構の深さは50cm程を測る。床面は長軸方向では浅いすり鉢状を呈し、東西方向は西側に向かって低くなる。床面には3個のピットが確認されており、遺構の長軸上に南北両端の2基が並び、残りの1基はやや西壁に近接した位置にある。ピットの形状はいずれもほぼ円形をしており、15～17cm程の径である。ピットの深さは、最も北に位置するピットは土坑床面からの深さが30cm、南側のピットは24cm、中央のやや西寄りのピットは最も浅く13cmを測る。ピットの底面は最も南に位置するピット以外は平坦な底面を呈する。

SK12 (第22図)

3次調査1区の中央部、南西向きの斜面に位置する。遺構は平面不整形で、規模は北東-南西方向で1.5m、北西-南東方向で1.6mを測る。遺構の深さは最も深いところで78cmを測る。床面は浅いすり鉢状を呈し、全体的に北から南にゆるやかに傾斜する。また、土坑の北側にステップ状の段がつく。遺物は出土していない。

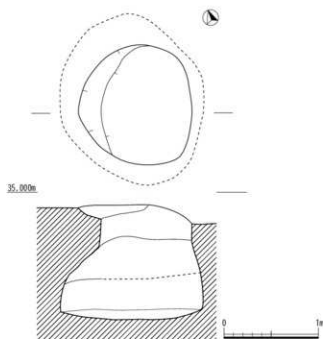
SK13 (第23図、図版10)

3次調査1区の中央部の北壁付近、尾根上の傾斜が比較的ゆるやかな場所に位置する貯蔵穴である。東側6.5mほどのところにSK09が位置する。遺構の床面はややゆがんだ円形を呈する。床面の規模は、北東-南西方向で1.83m、北西-南東方向で1.5mほどである。壁面は床面から袋状にすぼまり、床面から80cmほどの高さから上部は直立する壁が立ち上がる。遺構検出面から床面までの深さは1.2mを測る。以下の遺物の他にも弥生土器の小片が出土しているが、資料化できなかった。

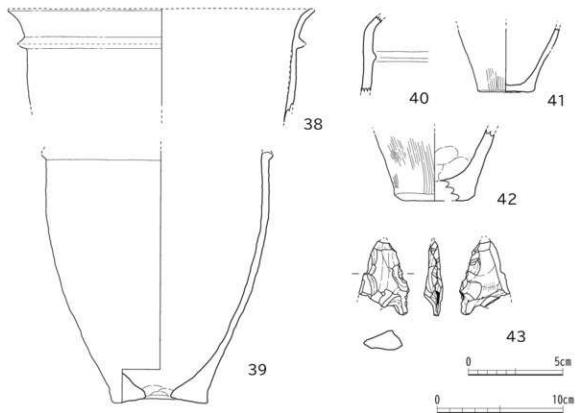
出土遺物 (第24図、図版21)

弥生土器

甕 (38～42) 38は胴部からゆるやかに外反する口縁部を呈する甕である。口縁下に断面三角の突帯が1条めぐる。口径は24.4cmに復元できる。39は底部から胴部まで残存する。器面は風化が著しく、調整など詳細は不明である。胴部最大径より上に突帯が1条めぐる。底部には焼成後に穿孔が施される。



第23図 SK13 実測図 (S=1/40)

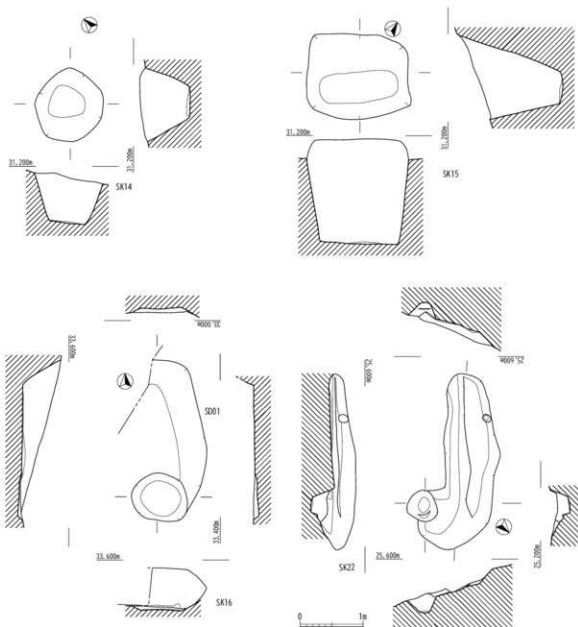


第24図 SK13 出土遺物実測図 (43はS=1/2、その他はS=1/3)

40は甕で、口縁端部は欠損するが、胴部から如意形の口縁部に至る器形である。口縁部下位に微細な突帯がつく。41は小形の甕であろう。底部から胴部外面にかけては器面の荒れが著しく、本来の器表面はほとんど残っていない。底径は4.6 cmである。42は甕の底部片である。底部外面を中心に器面の劣化が著しい。胴部外面は縦方向のハケメ、内面はナデである。

石製品

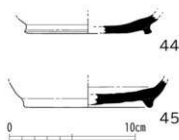
石鏃(43) 安山岩製の石鏃である。基部は片側が欠損しているが、二次加工が施されており凹基である。側縁のうち1辺は二次加工がみられない。そのため途中で製作をやめた未製品であろう。



第 25 図 SK14 ～ 16・SD01、SK22 実測図 (S=1/60)

SK14 (第25図、図版10)

3次調査1区東部の南向き斜面中央に位置する。SK12の東側約11mの位置にある。平面はややいびつな円形を呈している。遺構の規模は、北東-南西方向で1.17m、北西-南東方向で1.1mを測る。遺構の深さは82cmを測る。床面は北から南に向かってゆるやかに傾斜する。遺物は出土していない。



第26図 SK22出土遺物実測図(S=1/3)

SK15 (第25図)

3次調査1区の東部、調査範囲南壁近くの南向き斜面に位置する。土坑は南西-北東方向を長軸とする略長方形のプランを呈する。遺構の規模は、長軸方向で1.67m、北西-南東方向で1.37mを測る。南に傾斜する斜面に土坑が位置するため、遺構の壁面は南側がかなり低くなっている。遺構の深さは、1.67mを測る。床面は短軸方向で中央部がやや低くなるが、長軸方向はほぼ平坦である。詳細不明の土器細片が出土しているが、資料化はできなかった。

SK16 (第25図)

3次調査1区西部、2号石蓋土坑墓の北東1.2mほどに位置する。SD01の南端部と重複しており、平面は遺構の南東部がややすばまる円形を呈する。遺構の規模は東西方向で89cm、南北方向で77cmを測る。遺構の深さは、SD01の床面から8cmを測る。床面はほぼ平坦で北から南へわずかに傾斜する。遺物は出土していない。

SK22 (第25図)

3次調査2区中央部、SB01やSB02等が位置するSX07の南側斜面に位置する。南西-北東を長軸とする。遺構の南西部分は長楕円形で北東側が大きく膨らむ。北東部の膨らんだ部分にはピットが別に重複する。遺構の規模は、長軸方向で2.8m、北東部の遺構端部が膨らむ部分で最大幅1.3mを測る。遺構中央部の北西-南東方向の幅は88cmである。遺構検出面からの深さは最大で37cmを測る。遺構の床面は、南西側に向かってゆるやかに低くなる。以下の遺物の他に、弥生土器、土師器や須恵器の細片が出土しているが資料化はできなかった。

出土遺物 (第26図)

須恵器

杯(44・45) 44は杯B身の底部片である。底部と体部の境は不明瞭で、高台は低くやや外に開く。底径は10.5cmに復元できる。45も杯B身の底部片で、還元されておらず内外面とも明赤褐色を呈する。底径は10.0cmに復元できる。

5) 溝

SD02 (第27図、図版7)

2区東側の南東斜面平坦部の北西端に位置する。溝の中央部分では長辺の壁面立ち上がりが確認されており、南西の端部も確認できる。この溝の中央部分からSD03が南東側に1.9mのびる。SD02中央部のさらに北東側、溝の最も北東にあたる部分では北西側の壁や北東部端部の壁が確認されている。SD02

の最大長は 24.5m、溝幅は中央部の最も幅広い部分で 1.05m を測る。南西端部での溝肩部と床面のレベル差は 6.5 cm、北東端部では 7.0 cm である。床面は両端部の比高差が 19 cm で北東側から南西側へゆるやかに傾斜している。以下の遺物の他に須恵器の細片が出土している。

出土遺物（第 28 図、図版 21）

須恵器

壺（46）短頸壺の底部である。焼成不良で内外面とも橙色を呈する。内面は器面の風化が著しく調整は不明であるが、外面は回転ナデである。

土師器

甕（47）甕の口縁部片である。胴部から屈曲し口縁部が外に直線的に開く。口縁部外面は縦方向のハケメの後ヨコナデ、内面は丁寧なナデで仕上げる。

SD03（第 27 図、図版 7）

SD02 の中央部分から南東方向に確認された溝である。最大長は 1.9m、最大幅は 31.3 cm である。検出面から床面までの深さは 23.0 cm である。床面は SD02 から南東方向に折れる部分と南東端間での比高差が 12.5 cm あり、北西側から南東側へゆるやかに傾斜している。

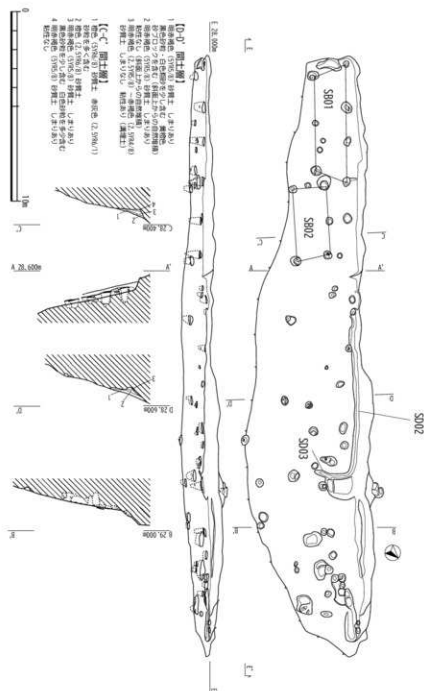
出土遺物（第 28 図）

須恵器

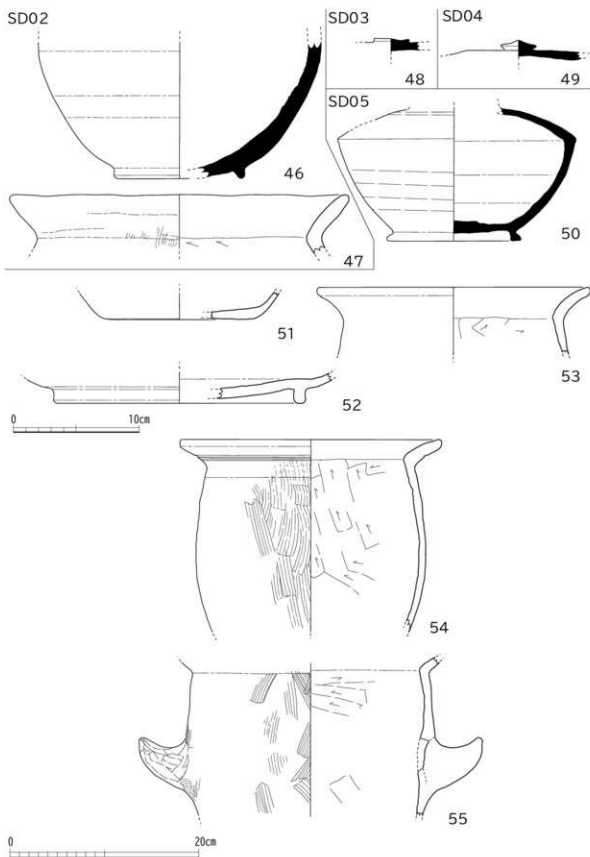
杯（48）杯 B 蓋のつまみ部の破片である。つまみは委縮し扁平化した形態を呈する。

SD04（第 29 図）

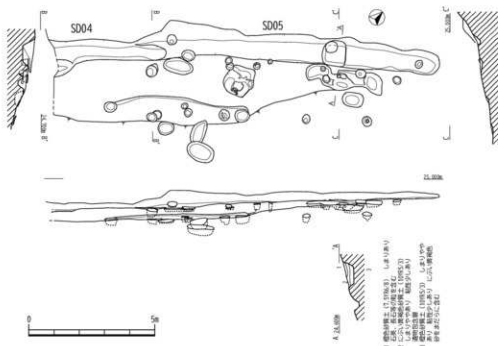
2 区中央部南側に位置する SX08 の南西際で確認された溝である。SD05 と



第 27 図 SD02、03、SX07 実測図 (S=1/200)



第 28 図 SD02 ～ 05 出土遺物実測図 (53 ～ 55 は S=1/4、その他は S=1/3)



第29図 SD04、05、SX08 実測図 (S=1/150)

ほぼ軸を同じくして重複している。南西―北東方向に軸をとる溝である。調査区西壁から北東方向に4.4m程で北東端の先端が確認できる。溝幅は確認された溝の略中央部で80cmを測る。溝の深さは溝の南西肩から31cmを測る。床面の標高は北東端が23.81m、南西端が23.71mで南西に向かってゆるやかに傾斜する。以下の遺物の他に、土師器と須恵器の細片が出土している。

出土遺物 (第28図、図版21)

須恵器

杯(49) 杯Bの蓋である。つまみはやや扁平な宝珠形である。焼成はあまく、器面の荒れが著しい。

SD05 (第29図)

SD04と軸を略同じくして、北東方向に延びる溝である。SD04の範囲と重複しているものと考えられる。調査区南西壁から北東端部までは最大で15.2mを測る。SD04の北東端部付近で溝肩がやや北側に膨らみ、この部分で溝幅は1.56mを測る。溝の略中央部で幅1.0m程となる。この中央部で溝の深さは38cm程を測り、溝の肩が北に膨らむ部分で73cmの深さを測る。北東端部では深さ5cmである。床面の標高は北東端部で24.27m、中央部24.09m、SD04の北東端部立ち上がり部分で23.83mとなり、SD04同様北東部から南西部に向かってゆるやかに傾斜する。以下の遺物の他に、須恵器小片、土師器の甕小片などが出土している。

出土遺物 (第28図、図版21)

須恵器

壺(50) 長頸壺で、頸部以上を欠損する。平底の底部にやや丸みを帯びた胴部がつき、胴部最大径屈

曲部から肩はゆるやかに湾曲しており、やや扁平な形態を呈する。底部内面中央部に粘土片が重なった状態で、表面にはハケメ状の痕跡がみられる。胴部最大径は19.0 cm、底径10.6 cmである。

土師器

杯(51) 杯の底部である。器面の風化が著しく調整など詳細は不明である。

盤(52) 高台付きの皿あるいは盤であろう。高台はしっかりしており直立する。器面の荒れのため調整などは不明である。高台径は20 cmに復元できる。

甕(53・54) 53は甕の口縁部片である。胴部から屈曲して、外反する口縁部がつく。胴部外面はハケメの後ナデ、内面はケズリの後ヨコナデである。口縁部は内外面ともヨコナデである。外面には一部スガが付着する。口径は20.9 cmに復元できる。54は甕で口縁部から胴部下半まで残存する。胴部外面は縦方向のハケメ、内面は胴部最大径部より下が斜め方向、それより上位は縦方向のケズリである。屈曲部外面には浅い沈線が3条めぐり、口縁部は内外面ナデである。口径は27.6 cmに復元できる。

甕(55) 甕の胴部片で、口縁部と胴部下半以下を欠損する。胴部から屈曲して外に開く口縁部が付く。外面は縦方向のハケメ、内面は把手部付近が斜方向、胴部上半は横方向のケズリである。口縁部屈曲部内面はナデである。

6) 性格不明遺構

SX02 (第30図、図版10)

1区中央部の南傾斜面、SC01の西壁に重複して位置する。SC01の壁面を切る形で、長軸を北西-南東にとり南西辺がやや長い略長方形のプランを呈する。遺構の規模は長軸方向で88 cm、短軸方向で60 cmを測る。遺構の深さは、遺構検出面から最大で28 cmである。床面は遺構中央部に向かってゆるやかに低くなる。以下の遺物の他にも焼成粘土塊の小片や炭化材の小片が出土している。

出土遺物 (第31図)

弥生土器

甕(56) 胴部の小片で突帯が1条めぐり、器壁が厚く、突帯も大きく甕棺の胴部片であろう。器面の風化が著しく、調整など詳細は不明である。

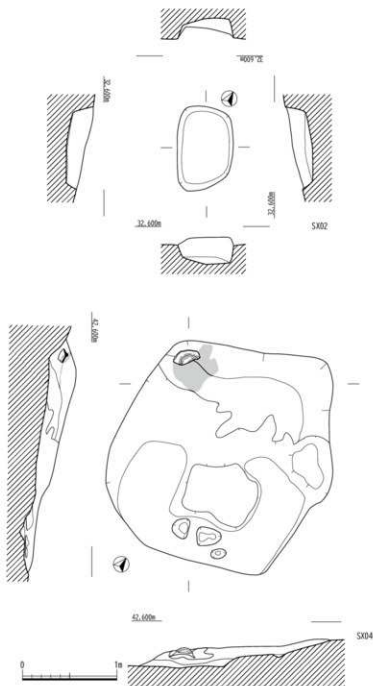
石製品

石斧(57) 安山岩製の扁平片刃石斧の基部片である。側縁と表面の研磨は丁寧だが、基部端部は研磨が粗い。残存部の最大幅は2.1 cmである。

剥片(58) 黒曜石の剥片で、わずかに2次加工を確認できる。

SX04 (第30図、図版10)

2区中央部南側、SD05の南側に位置する。北壁隅がやや張り出す隅丸方形に類するプランである。遺構の規模は、南北軸で3.5 m、東西方向で3.3 mを測る。床面までの深さは最大60 cmである。床面は北壁からゆるやかに南側に傾斜している。遺構の北西隅から土器が出土しており、その周辺には60 × 60 cmの範囲に炭化物が広がっている。



第30図 SX02、04実測図 (S=1/40)

のある床面を確認できる。規模は北東壁から南西壁までが1.7m、北西壁から最大で78cmが残存する。遺構の深さは、検出面から最も深いところで32cmを測る。

出土遺物 (第31図)

須恵器

瓶類 (61) 水瓶あるいは双耳瓶の底部であろう。低く華奢な高台が付く。高台の接地部分はやや摩滅している。底部外面はへら切り後ナデであるが、中央部に指頭圧痕が残る。体部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデで粘土積み上げの痕跡がみられる。底部内面には、降灰のため径5cm程の略円形の暗青

出土遺物 (第31図)

須恵器

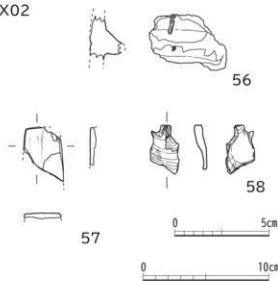
杯 (59・60) 59は杯Bの蓋で、口縁部の小片である。口縁部は内面に稜がみられるが、下方にはほとんど折れない。60は杯Bの身である。体部下半が丸みを持ち底部との境が不明瞭な形態を呈する。高台はやや低く底部端につき直立する。高台内はへら切り後ナデである。焼成はあまく、器面の劣化が著しい。

SX05 (第32図、図版10)

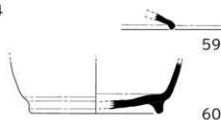
2区中央部から北東部にかけての平坦面 SX07 の北側斜面際に位置する。方形と楕円形の土坑が重複している可能性が高い。北西部の楕円形に近い平面を呈する土坑の規模は、北東-南西方向の長軸で1.0m、北西-南東方向の短軸で54cmを測る。遺構の深さは検出面から最大で32cmである。床面はすり鉢状に中央部がゆるやかに低くなる。この楕円形の土坑の床面から須恵器の底部が高台を接地した状態で出土している。

その南東部に接するようして確認された方形の土坑は北東部から南西部にかけて2段の高低差

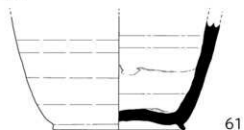
SX02



SX04



SX05

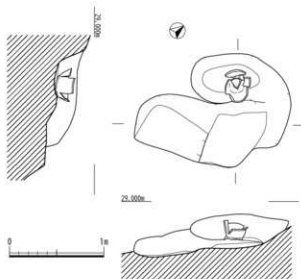


第31図 SX02、04、05出土遺物実測図（57・58はS=1/2、その他はS=1/3）

灰色部がみられる。高台径は10.5 cmである。

SX07（第27図、図版6）

2区中央部から東側の南東へ向かって傾斜する斜面に形成された平坦部である。上記のSD02やSD03がこの平坦面の北端に掘削されており、丘陵傾斜面を切り開き平坦面を造成している。SD02や03の土層断面図から、これらの溝が埋没したうえで、北西側の壁面上から土砂が流れ込みこの平坦部が埋没している様相が捉えられる。そのためSX07の平坦面を造成した上で、SD02や03を北西側の壁面直下に掘削して



第32図 SX05実測図（S=1/40）

いることがわかる。このような溝を切ることで、雨水が造成面に流れ込むのを防いでいたものと推定される。このような平坦面を造成した理由については不明といわざるをえないが、SB01やSB02を中心とした構築物、その他に構築物としては把握できていないが数多くのピットが掘削されている。

SX08（第29図、図版6）

2区中央部に位置し、SX07の南に造成された平坦面である。南西部分は調査区外に延びるものと想定される。SX07同様に、SX08平坦部の北西側斜面の直下にSD04とSD05を掘削している。これらの溝の機能についてもSX07同様に斜面の高い部分から流れ落ちる雨水が造成面に流れてくるのを防ぐという機能を想定することができる。具体的な用途、機能については不明であるが、この造成面にもSB03の他土坑やピットが複数掘削、構築されている。

7) その他の出土遺物 (第 33 図)

弥生土器

甕 (62) Ⅰ区包含層から出土した、甕の底部である。器面の劣化が著しく内外面とも調整など詳細は不明だが、底部外面のみナデ仕上げである。

石製品

石鏃 (63・64) 63 はⅠ区包含層から出土した安山岩製の打製石鏃である。先端部と右側縁を欠損する。無茎凹基式である。重量は 0.6g である。64 はⅡ区の遺構検出時に出土した。安山岩製の打製石鏃で、基部は無茎凹基式である。先端部を欠損する。重量は 0.5g である。

剥片 (65) 黒曜石の剥片である。風化した自然面が残り、刃部の加工も明瞭ではないが、鋭利な端部を使用した痕跡がみられる。

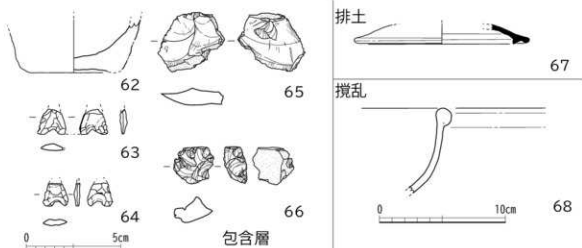
石核? (66) 黒曜石の小片で、2面自然面が残るが、その他の面は不定方向に剥離痕がみられる。

須恵器

杯 (67) 排土中より出土した杯の蓋である。口縁端部はやや肥厚気味に丸く収める。かえしは短く内傾しわずかに体部より下に出る。

磁器

椀 (68) 攪乱から出土した遺物で、青磁の鉢であろうか。口縁部は大ぶりの玉縁状を呈し、丸みを帯びた体部がつく。胎土は精良でにぶい灰色である。内外面施釉である。



第 33 図 その他の出土遺物実測図 (63～66 は $S=1/2$ 、その他は $S=1/3$)

(3) 小結：遺構の時期と遺跡の形成過程

丘陵の南東斜面を広く調査した結果、多岐にわたる時代の多様な遺構を確認した。一方で、調査面積や遺構の数に対して、出土遺物の数量は多いとは言えない。また、調査した遺構すべてから遺物が出土しているわけではなく、時期を比定することのできる遺構は非常に限られる。そのような制約がある中でも、今回の調査によって以下のような大まかな遺跡形成の過程を復元することは可能であろう。以下で主要な時代別に帰属する遺構の整理を行っておく。

【弥生時代】

SC01は出土遺物から弥生時代の遺構と考えられ、その下位で確認されたSC02についてもSC01より古い時代の遺構である。出土遺物から細かな時期を推定することはできないが、一つの特徴として石器が多く出土している点を挙げることができる。石器の組成は石鏃や剥片に加え、石廬丁や柱状片刃石斧などがあり、狩猟具、收穫具、伐採具と多岐にわたる。すべて同じ時期であるとは必ずしもいえないが、当地での弥生時代の土地利用の在り方の一端を示すものと考えられる。

これらの居住施設に加え、SK03やSK06、SK13などからも弥生土器が出土しており、SK06は出土土器から前期後半の所産と考えることができる。SK13は貯蔵穴であるが、出土遺物からSK06同様の時期と考えられる。

以上の弥生時代の遺構は、第3次調査1区中央部の尾根上から南斜面のゆるやかな場所に多い傾向がうかがえる。

【古墳時代初頭】

古墳時代の遺構としては、第3次調査1区の南西方向にのびる尾根上に位置する2基の石蓋土坑墓がある。これら2基は主軸がほぼそろった位置にある。副葬品は1号石蓋土坑墓から刀子が出土するのみで、時期を比定できる遺物は出土していない。ただし、周辺の調査事例などから古墳時代初頭の低墳丘の古墳と推定される。

【古代】

第3次調査範囲の西半部である1区では古代の遺構と比定できるものは確認できなかった。一方、調査範囲の東半部である2区では、南東向きの斜面地にSX07とSX08の2ヶ所でテラス状の造成を行った痕跡が確認された。この2つの造成面のうち標高の高いSX07ではSB01、SB02、SX07南側のSX08ではSB03の合計3棟の掘立柱建物で確認できたが、柱穴からの出土遺物は無く時期の比定は難しい。しかし、SX07に形成されたSD02、03とSX08に設営されたSD04、05、SK22などからは8世紀代の須恵器が出土しており、これらの遺構を奈良時代のものとして比定できる。

この時期に斜面地を造成後、溝を掘削した上で設営された掘立柱建物の機能などは不明である。ただし、出土した須恵器の組成をみると、個体数が少ないにもかかわらず、蓋杯以外の壺や長頸壺、瓶などが散見される。このような造成を伴う建物設営の目的を考えるうえで一つの特徴といえるかもしれない。いずれにせよ、古代に調査区内で何らかの活動が行われたものといえる。今後の周辺における調査事例の増加を待ちたい。

4. 第4次調査

(1) 調査概要 (第2・34・35 図、図版 11)

第4次調査区は大野城市中2丁目139-16、835-3に所在する。第3次、後述の第5次調査区の位置する丘陵の東側に谷を一つ挟んでのびる丘陵尾根上に位置する。調査面積は810 m²で、平成18年10月3日から11月30日にかけて調査を行った。

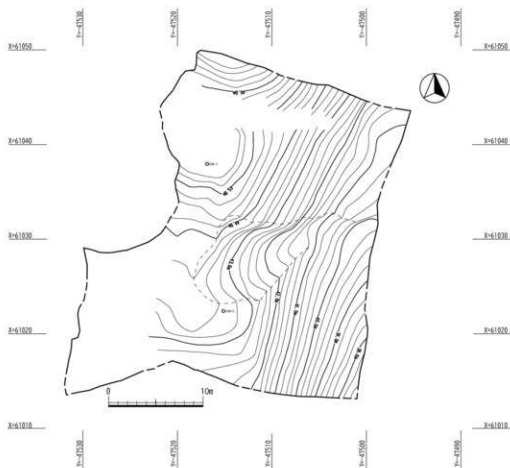
調査の結果、土坑4基、溝4条が確認された。遺物は弥生土器、土師器、陶磁器が出土したが、いずれも細片であった。

(2) 遺構と遺物

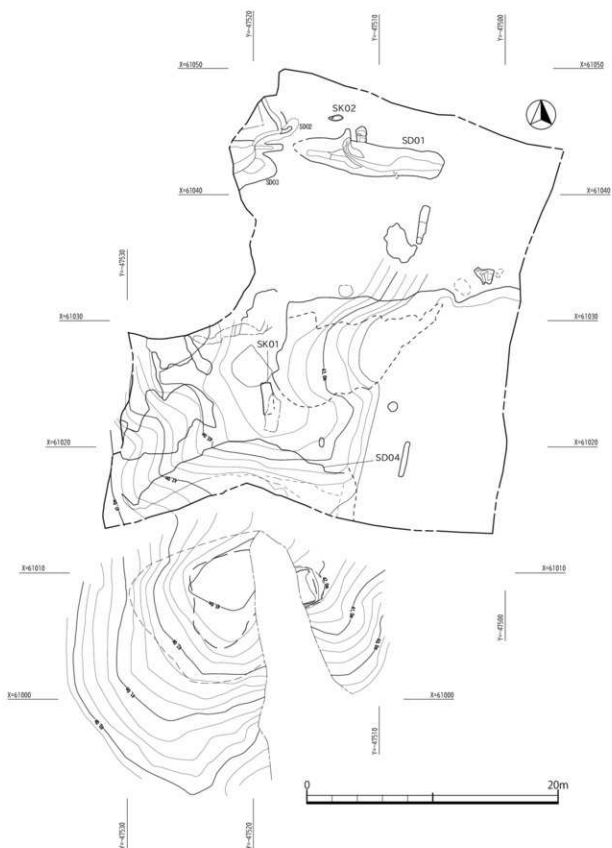
1) 土坑

SK01 (第36 図、図版 12)

調査区南半部の北西側からのびる小高い尾根上に位置する。平面形は、遺構の南東部が竪堀によって削平されているが、北北西-南南東に長軸をとる長方形プランを呈する。遺構の規模は、長軸方向で2.6m、短軸方向で最大90cmと推定される。床面までの深さは、非常に浅く最もよく残存するところで



第34 図 御陵遺跡第4次調査区現況測量図 (S=1/400)



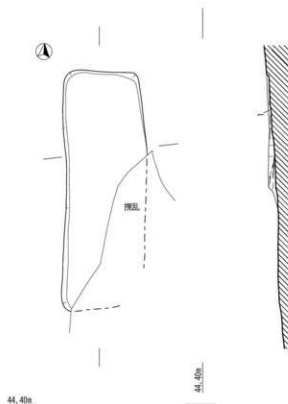
第 35 図 御陵遺跡第 4 次調査区遺構配置図と周辺の地形 (S=1/300)

10.6 cmである。残存している土坑の北半部では、床面は南に向かってゆるやかに傾斜している。遺構の南側は南東部分が消失しており不明な部分もあるが、遺構の中軸上および西壁際の床面レベルで北から南に向かってゆるやかに傾斜する。土坑内の埋土は、灰黄褐色粘質土でしまりがあり、また1~2cmの地山土のブロックを多く含む。かつ黒褐色有機質土を薄く層状に含んでいることから掘削土および周

辺の表層土を交えながら人為的に埋め戻されたものと推定できる。遺物は出土していない。

SK02 (第37図、図版12)

調査区北壁近くの南東に向かって低くなる傾斜面に位置する。平面形は東西に長軸をとるやや先細りの長楕円形である。遺構の規模は、長軸方向で1.2m、南北方向で最大47cmを測る。遺構の深さは、土坑の西端部が一段深くなっており、それより東側では最大18cm、一段低くなっている遺構の西端部では17cmを測る。土坑の東部分は東に向かって床面が低くなっており、東端部分でやや平坦になる。遺構の西端部の一段深くなる部分の床面は平坦である。遺物は土師器小片が出土したが、資料化は不可能であった。



第36図 SK01 実測図 (S=1/40)

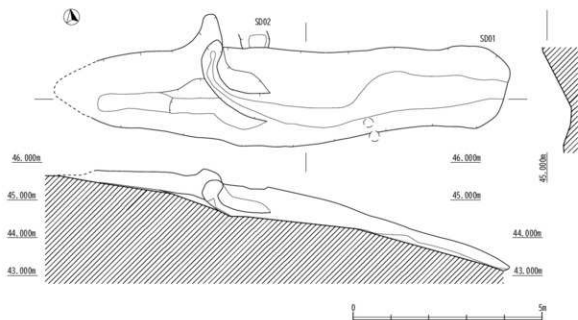


第37図 SK02 実測図 (S=1/40)

2) 溝

SD01 (第38図)

調査区北部中央付近の北壁近くに位置し、ほぼ東西軸に沿って形成された溝である。溝中央部やや西より部分で北側に突出する部分が確認でき、対応してその部分は、他の部分の床面より深く北側に湾曲する。西端部から東端部までは12m、南北の幅は最大で2.7mを測る。北側への突出部分は溝北壁の肩から80cmほど突出する。溝の深さは、北壁肩から床面までで最も残りの良い部分で80cmである。床面は、溝の西端部から北側に突出する手前の部分までは比較的ゆるやかで、そこから突出部分にか



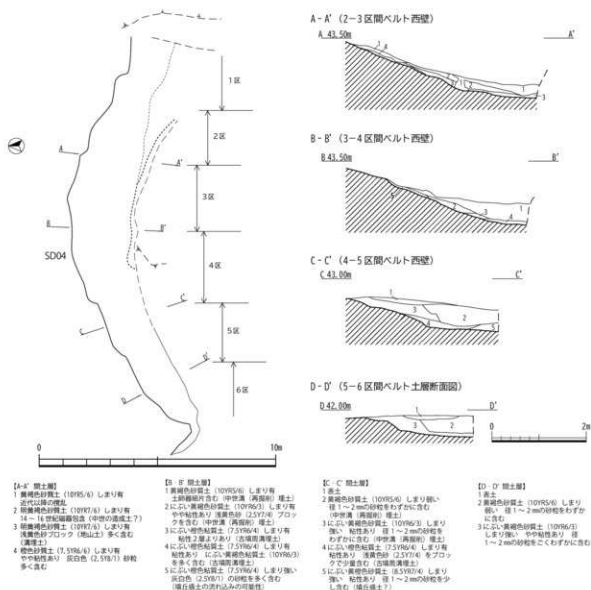
第 38 図 SD01 実測図 (S=1/100)

け傾斜が急になる。その東側は下端の幅が狭い部分は比較的傾斜がゆるく、下端の南北幅が広がる東端部近くで再度急傾斜となる。西端部と東端部の標高差は 2.5m に及ぶ。遺物は詳細不明の土器細片、弥生土器小片などが出土しているが、いずれも実測不可能であった。

SD04 (第 39 図、図版 13)

調査区南壁に沿って確認された弧状を呈する溝である。SK01 の南側に位置し、調査区外南側の墳丘状の小高い丘陵と SK01 の位置する平坦な尾根筋の間を切るように確認された。溝の規模は、確認できた範囲で東西の長さ 17.6m を測る。溝幅は溝の半分程度が調査区外にのびるため不明である。深さは溝の東半部の A-A' 間・B-B' 間で 1.2m、西半部の C-C' 間 70 cm、D-D' 間で 40 cm と次第に浅くなる。溝床面の標高は調査区壁面際の東端部で 42.3m、西端部で 41.1m と西に向かって低くなる。

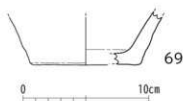
溝の埋土最下層からは土師器細片が出土し、再掘削の溝埋土から中世から近世にかけての陶磁器が出土した。これらの出土遺物の様相と堆積状況を合わせて考えると、埋土のうち最下層にあたる 5 層 (B-B' 間のふい橙色粘質土、C-C' 間のふい黄橙色砂質土) は、いずれも墳丘盛土の可能性がある。また、B-B' 間 2 層や C-C' 間 2・3 層は中世における溝の再掘削後の堆積である可能性が考えられる。上記の出土遺物のうち土師器は風化によって器面が著しく荒れており資料化できなかった。また、A-A' 間のベルトから残りの良い中世の磁器が 1 点出土したが、調査後散逸しており、今回報告することはできなかった。その他にも溝の上層からは細片化した磁器が出土しているものの資料化はできなかった。



第 39 図 SD04 実測図 (平面図 S=1/160、土層断面図は S=1/80)

3) その他の出土遺物 (第 40 図、図版 22)

遺構の帰属の不明な遺物がある。本調査区では出土遺物が非常に限られ、かつ資料化できるものもほとんどない。そのため出土位置等詳細不明ではあるが、参考までに報告する。



第 40 図 御陵遺跡第 4 次調査区出土遺物 (S=1/3)

弥生土器

甕 (69) 甕の底部片である。器面がやや荒れるが、内外面ともナデであろう。

(3) 小結

第4次調査では土坑や溝が複数検出されたが、出土遺物が少なくかつ小片のため時代や時期を比定するには困難を伴う。ただし、出土遺物に弥生土器や土師器が含まれることから弥生時代以降当地の利用が行われていたものといえるであろう。

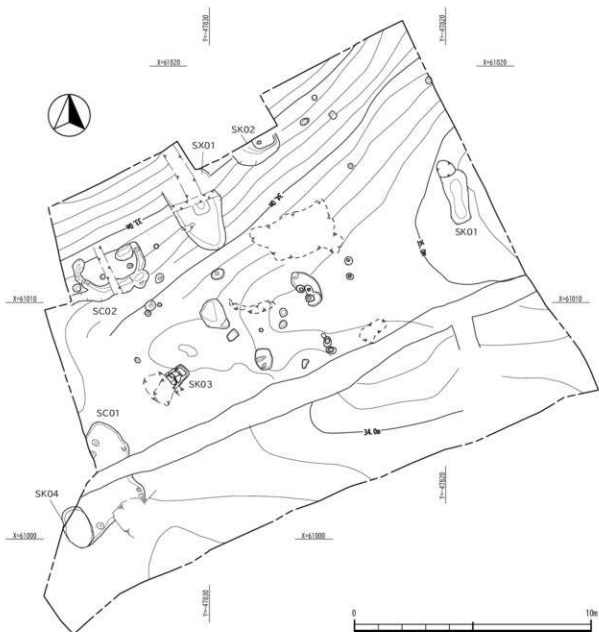
また、調査区中央部の尾根上平坦部で確認されたSK01については、周溝やマウンドなどは確認されなかったが、周辺に広がる御陵古墳群などの状況から、古墳の可能性が推測される。また、調査区南側隣接地で確認された略円形のマウンド状の高まり（図版13）と、調査区南部で確認された弧を描く溝は、古墳と周溝である可能性があろう。今後の周辺の調査が待たれる。さらにこのSD04からは中世から近世にかけての遺物も出土し、再掘削された痕跡が確認されている。そのため、中世から近世にかけても何らかの土地の利用・開発が行われたものと考えられる。

5. 第5次調査

(1) 調査概要(第2・41図、図版14)

御陵遺跡第5次調査区は大野城市中1丁目895-29に所在する。調査区は月隈丘陵南端部の東西に細長くのびる丘陵尾根部から北斜面にかけて位置し、第3次調査区の北に隣接する。標高は33～35mである。

調査面積は260㎡で、平成20年9月3日から10月22日にかけて調査を行った。調査の結果、竪穴状遺構2基、貯蔵穴1基、土坑2基、石蓋土坑墓1基、ピットが20基確認された。



(2) 遺構と遺物

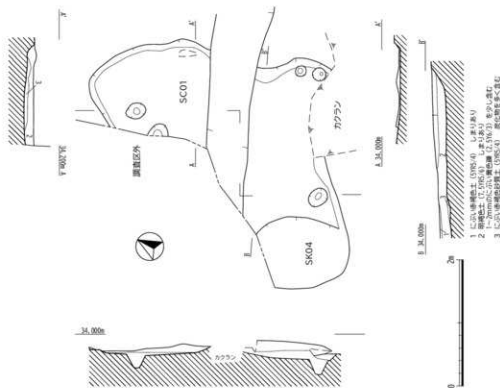
1) 竪穴状遺構

SC01 (第42図、図版15)

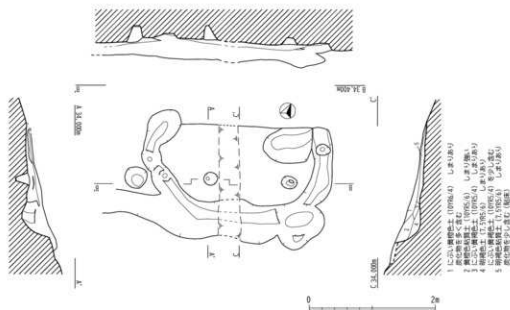
調査区南西隅近くに位置し、遺構の北西部分は調査区外にのびる。また、遺構の中央部や南東隅などは攪乱によって、南西隅はSK04によって消失している。そのため、平面プランには不明な部分があるが、北西-南東方向に軸をとる方形ないしは長方形に近いプランを呈するものと考えられる。遺構の規模は、東壁で最大3.8m、南壁で2.5mである。床面までの深さは検出面から最大で19.2cmを測る。床面はB-B'の断面ではほぼ平坦であるが、若干西側が低くなる。またこのB-B'上の調査区境界付近に炭化物を多く含む浅いすり鉢状の窪みが確認されており(B-B':3層)、炉の可能性があろう。遺構南西部や北隅に確認されたピットは床面からの深さも類似し23~24cmほどで柱穴の可能性もある。弥生土器や黒曜石の細片などが出土しているが図化はできなかった。

SC02 (第43図、図版15)

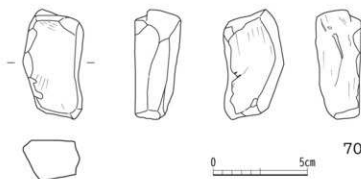
調査区北西部、SC01の北5m程の北西向き傾斜面に位置する。遺構の北半部は失われている。平面形態は遺構の半分が消失しており不明瞭であるが、略円形を呈するものと推定される。遺構の規模は北東-南西方向で3.1m、北西-南東方向で最大1.9m残存する。床面は遺構検出面からの深さが40~50cmである。壁際に壁溝がめぐり、床面からの深さは最大で16cmを測る。壁溝内や床面上にピットが複数



第42図 SC01 実測図 (S=1/60)



第43図 SC02 実測図 (S=1/60)



第44図 SC02出土遺物実測図 (S=1/2)

数確認されるが、遺構南側壁溝
近くのビット2基は西側が径・
深さともに24cm、東側ビット
が径28cm、床面からの深さ12cm
を測る。やや浅いか柱穴の可能
性がある。また、5層は炭化
物を少し含む粘質土で貼床の可
能性がある。以下に示す石製品
以外に、壁溝から詳細不明の土
器細片が出土したか資料化はで
きなかった。

出土遺物（第44圖、圖版22）

石製品

砥石（70）砂岩製の砥石である。砥面は2面確認できる。両面に使用に伴う研ぎ跡がみられる。重量は50.1gである。

2) 古墳 石蓋土坑墓 (SK03) (第41・45・46図、図版16・17)

周溝 (第41・45図)

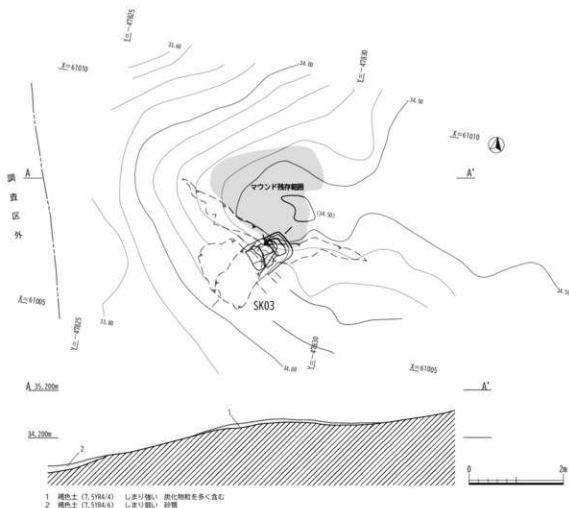
調査区内で周溝に相当するような溝状の遺構は確認できなかった。残存するマウンドの土層断面図(第45図)ではSK03の西側で2層の砂質土が堆積しており、浅い溝状の形状を呈する。しかし、その他にこの古墳の墳丘残存部や主体部周辺で周溝と明確に把握できる遺構は認められなかった。

墳丘（第41・45図）

古墳の主体部の可能性のある石蓋土坑墓は調査区の西半部、調査区内で最も標高の高い部分から南西方向に延びる舌状の尾根上に位置する。石蓋土坑墓の北側は標高が34.5m程の平坦部を形成しているが、尾根筋を軸とする土層断面（A-A'）からこの平坦部を中心に2.4～2.6m程の範囲に盛土の残存部が10cmほどの厚さで確認される。この盛土の残存部の東側は南北から標高34.4～34.5mのコンタが尾根筋に入り込み谷状の地形を形成している。また、石蓋土坑墓の蓋石上にも薄く盛土が確認された。

主体部 SK03（第46図）

調査区内を東から西にのびる舌状の尾根上傾斜地に位置する。遺構の南半は木根による攪乱のため破壊されている。そのため、蓋石は北半のみ残存する。墓坑の推定長は1.4m、幅0.4mを測る。墓坑は外縁部を浅く掘削してテラス状の段を設け、そこに蓋石を高架する。テラス部の深さは10cm、幅は18cm前後を測る。墓坑底までは検出面から40cmの深さを測る。小口部は壁がほぼ垂直に立ち上がる。



第45図 墳丘とSK03（石蓋土坑墓）実測図（S=1/80）



第46図 SK03（石蓋土坑墓）実測図（S=1/40）

3) 土坑

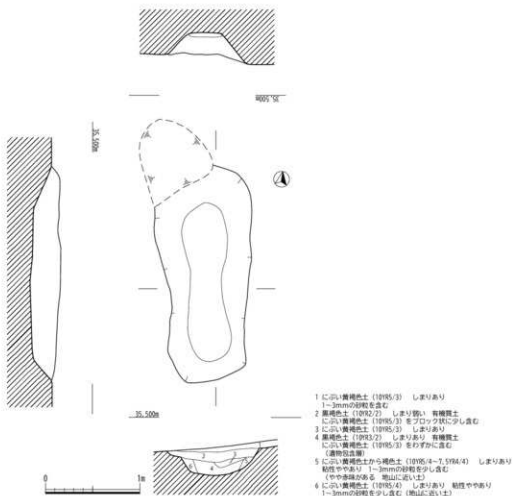
SK01（第47図、図版18）

調査区東壁中央部近くの標高 35.0 ～ 35.2m の最も高い部分に位置する。北西部が一部攪乱によって破壊されるが、略南北方向に長軸をとる隅丸長方形を呈し、やや北側短辺が幅広になる。遺構の規模は長軸方向で 2.3m、短軸方向で北側 1.0m、南側で 0.84m を測る。遺構の深さは、検出面から最大で 34cm を測る。床面は長軸方向でわずかな起伏はあるがほぼ平坦である。

土層堆積状況を見ると、5・6層はにぶい黄褐色土のしまりのある粘質土で、地山に近い土層が堆積している。一方、これら5・6層と不整合な堆積状況をする4層は黒褐色の有機質土壌で、3層の地山に近い土層を挟んでその上に堆積する2層も同様の土に地山ブロックを若干含む。このような堆積状況から、棺などの埋葬施設設置後に5・6層など土坑掘削時に生じた地山由来の土を裹込めとして埋め、その後に土坑を埋めた土が4～2層と考えられる。土層図で観察される5層と6層の間に堆積する4層は棺が腐朽した後に棺上の埋土が陥没・崩落したものと考えられる。このような土層堆積状況の所見から、本土坑は木棺墓である可能性が高い。埋土中から土器の細片、黒曜石の小片が出土したが図化できなかった。

SK02（第48図）

調査区北壁中央部に位置する。遺構の半分ないしはそれ以上が調査区外にのびる。そのため、平面プランなど詳細は不明点があるが、残存部分から平面形は略方形ないしは長方形を呈するものと推定できる。遺構の規模は、北東－南西軸で 2.1m、北西－南東方向で 1.1m を測る。遺構の床面には壁溝がめぐり、南西側で最大幅 1.0m を測り、断面形は浅いすり鉢状、北東部では深さ 16cm で断面 V 字形を呈する。床面中央部では深さ 8cm のピットが検出されている。床面は北東から南西に向かってゆるやかに傾斜す



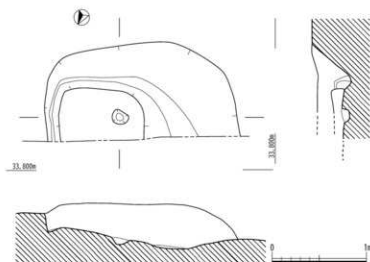
第47図 SK01実測図(S=1/40)

る。遺物は以下に示す土器以外にも弥生土器の薄片や黒曜石の剥片、チップなどが出土したがいずれも資料化できなかった。

出土遺物 (第49図)

弥生土器

甕(71) 甕の底部片である。底部はわずかに上げ底になる。器面の荒れが著しく詳細不明である。



第48図 SK02実測図(S=1/40)

SK04 (第50図、図版18・19)

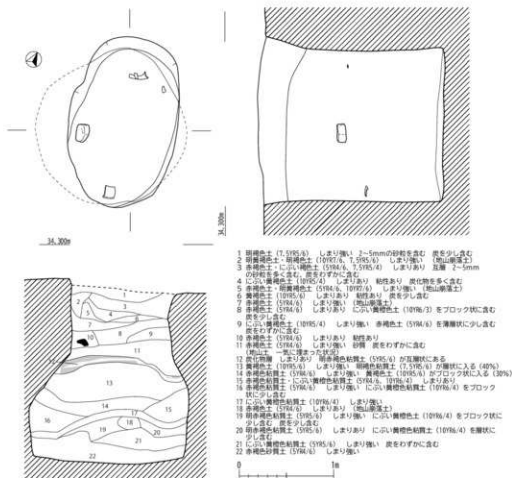


第49図 SK02 出土遺物実測図
(S=1/3)

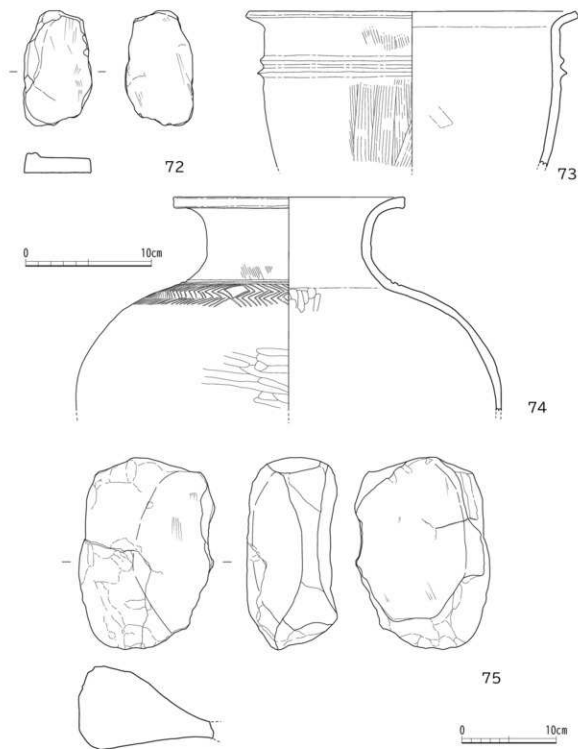
調査区南西隅に位置する貯蔵穴である。SC01の南西部を切つて形成される。上端のプランは北西-南東方向を長軸にとる長楕円形を呈する。長軸方向で2.0m、東北東-西南西方向の短軸で1.56mを測る。遺構の深さは遺構検出面から最大で2.0mで、床面は直径1.6～1.7mの隅丸方形を呈する。北東-南西軸では壁は床面から略垂直に立ち上がる。一方、東北東-西南西軸では、床面から62～82cmほどの高さで壁面が上に向かってすぼまり、

床面から1.2m程の高さから垂直に壁面が立ち上がる。遺物は10層や12層(炭化物質層)などからまとまって出土した。

以下に報告する資料の他にも12層から弥生土器の甕や壺の細片が多く出土したが資料化は不可能であった。以下、遺物を比較的多く含む12層を境に1～11層を上層とし、それより下層から出土した遺物と区分して報告する。



第50図 SK04 実測図 (S=1/40)



第51図 SK04出土遺物実測図（75はS=1/4、その他はS=1/3）

上層出土遺物（第51図、図版22）

石製品

砥石（72）砂岩製の砥石である。砥面は2面確認できる。最大長9.1cm、最大幅5.3cm、厚さ1.6cm、重量72.0gである。

下層出土遺物（第51図、図版22）

弥生土器

甕（73）炭化物層から出土した甕である。如意形口縁で胴部上位に突帯が2条めぐる。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面はタテハケ、内面はナデである。口径は26.0 cmに復元できる。

壺（74）炭化物層から出土した壺である。胴部最大径が上位にあり、直立する頸部から外反する口縁部にいたる。肩に貝殻で施文した羽状文が施され、羽状文の上部に2条の沈線がめぐる。頸部外面は縦方向のハケメの後ヨコナデ、胴部外面は横方向のミガキである。内面は口縁部から頸部はヨコナデ、胴部はナデである。胴部と頸部の接合部分には指頭圧痕が残る。口径18.4 cm、胴部最大径33.8 cmで、残存高は16.9 cmである。

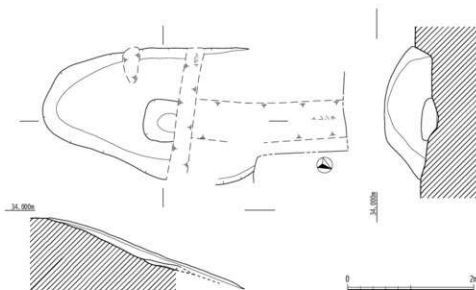
石製品

砥石（75）砂岩製の砥石である。砥面は2面確認できる。表裏面はいずれもすり鉢状を呈する。砥面として使用しているため平滑であるが、両面とも一部に擦痕と敲打痕がみられる。

4）性格不明遺構

SX01（第52図）

調査区北西部、SC02から北東2 mの北西に向かって傾斜する斜面に位置する。斜面地に位置するため遺構の南部分のみ残存する。そのため全体の平面形態など詳細は不明であるが、残存部分からは北西－南東方向に長軸をとる長楕円形を呈しているものと推定できる。また、遺構の南東端から長軸に沿って1.6 mのところまで一段深くなる。遺構の規模は、長軸方向で3.3 m 残存し、短軸方向で最大2.16 mを測る。床面は遺構の南端部から地形の傾斜に沿って低くなる。遺構検出面から床面までの深さは残りの良い部分で16 cmである。一段低くなっている部分はさらに7～8 cmほど深くなる。遺物は弥生土器の細片や黒曜石の細片などが出土するが、いずれも資料化できなかった。



第52図 SX01 実測図 (S=1/60)

5) その他の出土遺物

検出面出土遺物（第 53 図）

弥生土器

甕（76）底部の小片で、外面はナデである。小片のため詳細は不明である。



第 53 図 その他の出土遺物
実測図（S=1/3）

(3) 小結

以下、御陵遺跡第 5 次調査で検出した弥生時代から古墳時代を中心とする遺構の時期を整理しておく。
【弥生時代】調査区内で竪穴状遺構が 2 基確認された。調査区外にのびる SC01 は平面形が不明であるが、北斜面に位置する SC02 は円形を呈する住居跡であろう。出土遺物は SC02 の砥石のみが資料化できるものであったが、SC01 からは細片ながら弥生土器や黒曜石の細片が出土した。これらから 2 基の竪穴状遺構は、弥生時代の住居跡と推定される。さらに貯蔵穴である SK04 からは弥生時代前期後半の土器が一括して出土した。このような状況から弥生時代前期後半を中心に調査区内が生活域として利用されていたことがうかがわれる。

【弥生時代末～古墳時代初頭】調査区内中央部の尾根上で盛土の痕跡と石蓋土坑墓 1 基が確認された。時期比定可能な副葬品などの出土遺物は無く、墓坑の南半は攪乱によって破壊されていた。また、マウンドも削平によりわずかにその痕跡が残るのみであったが、低墳丘を有する墳墓であった可能性が高い。

【中世】調査区東部の最も標高の高い尾根上で SK01 が確認された。土層の堆積状況などから木棺墓の可能性が高い。遺物が出土していないため時期比定は困難であるが、墓坑の形態や主軸の方向などから中世墓と推定できようか。

表1 御陵遺跡第2次調査出土遺物観察表

報告 番号	種類	器種	出土地点	出量(m ²) ①口縁②器底③底縁④高台縁 ⑤最大径(直径)⑥残存部	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
1	陶器	甕	S001埋土中	①(11.5) ②(4.5)	内外面施釉 外面磨付近は磨削 内外面 同軸ナズ	A:精良 B:良好 C:釉5V2/2暗赤褐色、 N1.5/黒色 露胎2.5V9/3黄褐色	天目甕
2	陶器	甕鉢	S001底面直上 埋土中	②(6.0) ③(11.2)	底面外面同軸糸切、胎土自然剥がれ 底 縁外面同軸ナズ 内面磨付 残存部は内 外面無釉	A:精良 B:良好 C:内2.5V9/4に2.5V赤褐色 外3V9/4黄褐色 外2.5V9/2暗褐色 2.5V9/4に2.5V赤褐色	肥前産
3	灰土器	杯	S001 25K 埋土中下層	②(2.4) ③(9.6)	内外面同軸ナズ	A:1mm程度の白色砂粒を含む B:やや不良 C:内N6/灰色 外10V5/1灰色、2.5V6/4に2.5V 褐色	
4	陶器	大甕	S001 25K 埋土中下層	②(4.5) ③(7.6)	底面外面同軸ヘラ削り、同軸ナズ 底縁 内面施釉、同軸ナズ	A:精良 白色砂粒をわずかに含む B:良好 C:釉5V2/2に2.5V黄褐色 露胎2.5V9/2暗 褐色 胎土2.5V9/3黄褐色	外面一部に釉が施る
5	磁器	染付陶	S001 25K 埋土中下層	②(2.6) ③(3.6)	内外面施釉 外面に染付一部残存する	A:精良 B:良好 C:釉5V9/1灰白色、 7.5V3/1暗緑灰色～7.5V6/1緑灰色	
6	磁器	皿	S001 25K 埋土中下層	①(11.6) ②(3.1) ③(6.0)	内外面施釉 折縁口縁、端部は口縁2枚 口縁	A:精良 B:良好 C:釉全面乳白色、口縁端部 2.5V9/4黄褐色 胎土白色	
7	灰土器	杯	S003 15K 埋土中下層	②(1.9)	内外面同軸ナズ	A:白色砂粒を少し含む B:良好 C:内外面 N5/灰色	
8	灰土器	杯	S003 15K 埋土中下層	②(3.6)	内外面同軸ナズ	A:濃緑な白色砂粒を多く含む B:良好 C:内 N5/灰色 外N4/灰色～N3/暗灰色	
9	磁器	染付陶	S003 1-25K間 へルト埋土中下層	②(4.5)	内外面施釉 外部外面に七宝文、高台付 近に磨削文	A:精良 濃緑な黒色粒を多少含む B:良好 C:釉5V9/2に2.5V黄褐色 胎土 5V9/1灰白色	磨削陶 18c前半～19c初
10	陶器	皿	S003 1-25K間 へルト埋土中下層	②(3.8)	内外面施釉 高台近くは磨削 磨削状の 口縁	A:精良 濃緑な黒色粒を多少含む B:良好 C:釉5V9/2に2.5V黄褐色 胎土 10V9/2灰白色	肥前産17c後半
11	青磁	甕	SF00埋土中	②(2.5) ③(5.6)	内外面施釉、高台内は粗く釉を磨くなど 見込み磨削内に草花文を施す 高台内 は深く中央部は5V6になる	A:精良 B:良好 C:釉7.5V6/2オリーブ黄褐色 ～7.5V5/3オリーブ色 露胎10V9/2に2.5V黄 褐色 胎土5V7/1灰白色	太平寺分館IV箱?

表2 御陵遺跡第3次調査出土遺物観察表①

報告 番号	種類	器種	出土地点 出量(m ²) ①口縁部②底縁部③高台縁 ④最大径(直径)⑤残存部	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考	
12	土器土器	甕	15K S001 15K埋土中層上面	②(5.9) ③(7.5)	内外面調整不明 底面穿孔あり	A:2mm以下の長石粒、石英を含む B:良好 C:内N7.5V9/6 黄褐色	
13	土器土器	甕	15K S001 30K埋土上層	②(7.4) ③(7.6)	内外面調整不明	A:2mm以下の長石粒、石英を多く含む B:良 好 C:内10V9/8 黄褐色 外7.5V9/6 黄褐色 ～5V9/7 黄褐色	
14	土器土器	甕	15K S001 45K埋土下層	②(2.1) ③(6.0)	内外面調整不明	A:1mm以下の長石粒、2mm以下の石英を含む B:良好 C:内7.5V9/8 黄褐色 外5V9/6 黄 褐色	
15	石製品	石位丁	15K S001 B-B'へルト 埋土中層	残存長7.15 残存幅7.2 厚30.81 重530.0			対馬石(砂岩) 弥生前期
16	石製品	鉄入柱状 片方石神	15K S001 埋土中層	残存長13.7 幅5.0(鉄部4.5) 厚32.8 重3309.0			灰岩製
17	石製品	砥石	15K S001 25K床面直上	残存長10.3 残存幅6.2 残存厚3.6 重2393.3			砂岩 砥石面磨削?
18	石製品	石鏡	15K S001 25K埋土中下層	長さ21.1 幅1.3 厚30.5 重31.0			安山岩製
19	石製品	石鏡	15K (S001内) SK10埋土中	長さ19.8 幅1.58 厚30.5 重31.1			黒曜石製
20	石製品	ドリル?	15K S001 25K埋土中下層	長さ21.1 幅2.7 厚31.2 重36.6			黒曜石製
21	石製品	二次加工 銅片	15K S001 上方検出中	長さ4.2 幅2.5 厚31.0 重9.1			黒曜石製
22	石製品	銅片	15K S001 B-B'へルト 埋土中層	長さ2.8 幅2.45 厚31.2 重36.6			黒曜石製
23	石製品	二次加工 銅片	15K S001 45K-1埋土中	長さ2.8 幅2.6 厚30.6 重33.6			黒曜石製
24	石製品	チップ?	15K S001 65K埋土下層	長さ2.2 幅4.15 厚31.05 重37.2			黒曜石製
25	石製品	チップ	15K S001 B-B'へルト 埋土中層	長さ2.7 幅2.5 厚30.7 重32.8			黒曜石製

表3 御陵遺跡第3次調査出土遺物観察表②

報告 番号	種類	器種	出土地点	重量(g) ①口縁②器高③底径④高台径 ⑤最大径⑥(後元部)残存部	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
26	石製品	石核	1K S301 4区際ヘルム 埋土上層	長34.15 幅5.6 厚32.4 重269.2			安山岩製
27	石製品	刮片	1K S301 埋土1層下層	縦1.30 横3.36 厚31.7 重316.4			黒曜石製
28	石製品	刮片	1K 石蓋土層 2 検出中	長33.0 幅3.6 厚30.7 重36.6			黒曜石製
29	弥生土器	甕	1K S303 2区埋土上層	②(5.8) ③(8.0)	底面外面ハケム諸開オサユ 内面ナデ	A:1mm以下の灰石、4mm以下の石を多く含む B:良好 C:P7.S307/4に5A+褐色 外7.S307.3黄褐色	
30	石製品	石核	1K S303 2区埋土上層	長32.65 幅1.78 厚30.35 重51.3			安山岩製
31	石製品	刮片	1K S303 2区埋土上層	長32.67 幅3.05 厚30.98 重37.2			黒曜石製
32	石製品	二次加工 刮片	1K S303 2区埋土上層	長33.47 幅3.28 厚31.15 重51.0			黒曜石製
33	石製品	石核	1K S303 2区埋土上層	長31.8 幅2.4 厚32.4 重39.3			黒曜石製
34	弥生土器	釜	1K S306 埋土上層	①(12.2) ②(3.7)	口縁部外面ヨコナデ 他は3ガテ	A:1mm以下の灰石、5mm以下の石を含む B:良好 C:P5D307.6褐色 外5YR7.8褐色	
35	弥生土器	甕	1K S306 埋土上層	②(13.0)	体部外面下位ハケム 体部内面調整不明 他はナデ 体部外面中位部は自然剥落の 付付 口縁部端部のみ目を揃す	A:1mm以下の灰石、石を含む B:良好 C: P7.S308.6黄褐色 外7.S307.6褐色	外面磨行着
36	石製品	石核	1K S306 埋土上層	長32.6 幅1.88 厚30.40 重32.2			黒曜石製 煎茶煎茶式か?
37	石製品	石核	1K S306 埋土上層	縦2.18 横3.0 厚32.29 重51.2			黒曜石製
38	弥生土器	甕	1K S313 埋土上層	①(24.4) ②(8.9)	口縁部外面ヨコナデ 他は調整不明 口 縁部外面下位剥落部が付付	A:2mm以下の白色砂粒、石を含む B:良好 C:P2.S313.6黄褐色 外7.S308.6黄褐色	
39	弥生土器	甕	1K S313 埋土上層	②(19.9) ③(7.5) 孔2孔	内外面調整不明 底面穿孔あり 外面割 れ目自然剥落の付付	A:2mm以下の白色砂粒、石を含む B:良好 C: P7.S308.6黄褐色 外7.S307.6褐色 外7.S308.6褐色	
40	弥生土器	甕	1K S313 埋土上層	②(5.9)	内外面ナデ 外面剥落部が付付	A:2mm以下の灰石、石を含む B:良好 C: P7.S308.6黄褐色 外7.S307.6褐色	
41	弥生土器	甕	1K S313 埋土上層	③(5.0) ④4.5	体部外面下位ハケム 体部内面ナデ 底面内面工具痕か? 他は調整不明	A:2mm以下の灰石、石を含む B:良好 C: P7.S307.6褐色 外5.S316.1黄褐色	
42	弥生土器	甕	1K S313 埋土上層	②(5.7) ③(6.4)	底面外面ナデ 体部外面ハケム 内面ナデ	A:2mm以下の灰石、石を多く含む B:良好 C:P1D307/4に5A+黄褐色 外7.S308.6に 5A+褐色	
43	石製品	石核	1K S313 埋土上層	長33.9 幅2.7 厚31.0 重37.7			安山岩製
44	弥生土器	高台付杯	2K S322-2	②(1.5) ③(10.5)	底面外面ハケム後ナデ 他は調整ナデ	A:微細な長石、石を含む B:良好 C:内 面P16.1黄褐色 外5D4.1暗黄褐色	
45	弥生土器	高台付杯	S322-1	②(2.2) ③(10.0)	外面ナデ 内面調整不明一部磨打痕 か?	A:2mm以下の白色砂粒、石、黄砂を含む B:良好 C:内面P15.8明赤褐色 外5.S315.8 明赤褐色	
46	弥生土器	盃?	2K S302 2K	②(16.0) ③(10.4)	外面調整ナデ 内面調整不明	A:1mm以下の灰石、石を含む B:良好 C: P1D308.6褐色 外5D37.6褐色 外5D37.6褐色	底面直上
47	土師器	甕	2K S302 1K	②(27.0) ③(4.7)	底面外面ハケム 底面内面割り 口縁部 外面ヨコナデ	A:1mm以下の灰石、2mm以下の石を少し含 む B:良好 C:P7.S307.6褐色 外7.S308.6 黄褐色、2.S313.1黒褐色	外面黒煎
48	弥生土器	杯蓋	2K S303-2K 埋土	②(1.8) つまみ径3.9 つまみ高0.3	内外面調整ナデ	A:微細な長石、石を少し含む B:良好 C:内 面P17.1明黄褐色 外5D15.1黄褐色	
49	弥生土器	杯蓋	2K S304 3K埋土	②(1.5) つまみ径3.8 つまみ高0.8	外面調整ナデ 内面調整不明	A:微細な長石、石を少し含む B:不良 C:内 面P15.3黄褐色	
50	弥生土器	長胴甕	2K S305-4	②(10.6) ③(10.6) ④(19.8)	底面外面、肩面外面位調整ナデ割り 底面内面ハケム 他は調整ナデ	A:1mm以下の灰石、石を少し含む B:良好 C: 内面P17.1明黄褐色 外5D15.1黄褐色	
51	土師器	杯	2K S305-4	②(2.1) ③(11.8)	内外面調整不明	A:微細な長石、黄砂を含む B:良好 C:内 面P16.6褐色	
52	土師器	甕	2K S305-2	②(2.4) ③(10.0)	内外面調整不明	A:1mm以下の灰石、石を少し含む B:不良 C:P5D308.6褐色 外5D37.6褐色	
53	土師器	甕	2K S305-3K	①(20.9) ②(7.1)	体部外面ハケム後ナデ 体部内面調整 ナデ 口縁部内外面ヨコナデ	A:2mm以下の白色砂粒、石、微細な長石、 黄砂を含む B:良好 C:内面P16.6黄褐色 外7.S308.6黄褐色、10YR7.1灰白色	口縁部内面一部黒煎 体部外面磨行着

表4 御陵遺跡第3次調査出土遺物観察表③

報告 番号	種類	器種	出土地点	土量 (cm-g) ①口縁②器高③底径④高台径 ⑤最大径⑥(備え欄) (残存部)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
54	土師器	甕	25K S005-4	①(27.4) ②(28.3)	体部外面ハケテ 体部内面削リ (口縁部)	A:20cm以下の白色砂粒、右翼、微細な長石粒を含む B:良好 C:内50V7/6 褐色 外2.5V2/1 茶色、7.5V38/6 浅黄褐色	外面液熱による黒変(カ)
55	土師器	甕	25K S005-4	②(16.9)	体部外面ハケテ 体部内面削リ(底ナデ) 肥子底ナデ成形	A:20cm以下の白色砂粒、右翼、微細な長石粒を含む B:良好 C:内50V7/6 褐色 外2.5V38/6 浅黄褐色	
56	弥生土師	甕類(カ)	15K S302 土師集中塚土中	②(3.5)	外面ナデ 内面調整不明 スギが入る	A:4cm以下の砂粒を多く含む B:不良 C:内3.5V38/6 褐色 外5.0V7/6 褐色	
57	石製品	扁平片 刀 石片	15K S302 埋土土層	残存長1.85 幅2.1 厚5.8.28 最3.2			安山岩製
58	石製品	二次加工 刮片	15K S302 埋土土層	残存長3.38 幅1.55 厚36.45 最31.2			基岩石製
59	甕器	杯蓋	25K S304 (炭化物下)	②(1.2)	内外面調整ナデ	A:20cm以下の長石、右翼を少し含む B:良好 C:内50V7/1 明黄褐色 外5.0V3/1 黄灰色～5.0V4/1 暗黄褐色	
60	甕器	高台付杯	25K S304	②(4.1) ③(10.7)	底面外面ハケテ(底ナデ) 他は調整ナデ	A:微細な長石を含む B:良好 C:内5.0V7/2 黄褐色 外5.0V7/2 に近い黄褐色	内面炭化物付着
61	甕器	甕	25K S305	②(8.9) ③(10.5)	底面外面ハケテ(底ナデ) 底面内面削リ ナデナデ 体部外面削リ～9割(口 縁に調整ナデ)	A:20cm以下の長石を含む B:良好 C:内5.0V7/1 黄褐色 外5.0V6/1 黄灰色～5.0V7/1 暗黄褐色	内面一部焼戻
62	弥生土師	甕	15K テラス地区K 検出中 包含層	②(4.2) ③(8.3)	底面外面ナデ 他は調整不明	A:30cm以下の白色砂粒、右翼、1cm以下の長石粒を含む B:不良 C:内5.0V38/6 浅黄褐色	
63	石製品	石錘	15K 調査区 西端谷部包含層	残存長1.22 残存幅1.5 厚30.35 最26.6			安山岩製
64	石製品	石錘	25K 検出中	残存長31.2 幅1.35 厚30.3 最30.5			安山岩製
65	石製品	刮片	15K テラス地区K 検出中 包含層	残存長33.1 幅3.2 厚30.9 最38.4			基岩石製
66	石製品	石刮子	15K テラス地区K 検出中 包含層	残存長31.9 幅1.1 厚31.4 最34.4			基岩石製
67	甕器	杯蓋	弥生土中	②(11.4) ③(1.5) 受部径(14.6)	内外面調整ナデ	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内5.0V4/1 暗黄褐色 外5.0V3/1 暗黄褐色	
68	銅器	銅	15K 調査区 東端谷部埋土	②(6.7)	内外面磨削	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:軸3.5V18/1 オリーブ灰色 胎土N6/1 灰色	

表5 御陵遺跡第4次調査出土遺物観察表

報告 番号	種類	器種	出土地点	土量 (cm-g) ①口縁②器高③底径④高台径 ⑤最大径⑥(備え欄) (残存部)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
69	弥生土師	甕	S301	②(4.2) ③(8.8)	内外面ナデ	A:10cm以下の白色砂粒、長石を少し含む B:良好 C:内5.0V7/4 に近い黄褐色	

表6 御陵遺跡第5次調査出土遺物観察表

報告 番号	種類	器種	出土地点	土量 (cm-g) ①口縁②器高③底径④高台径 ⑤最大径⑥(備え欄) (残存部)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
70	石製品	砥石	9C02 東区ブロン内	残存長5.7 幅3.0 厚32.1 最50.1			砂岩製
71	弥生土師	甕	S302	②(12.6)	内外面調整不明	A:20cm以下の長石、右翼を多く含む B:良好 C:内5.0V7/4 に近い黄褐色 外2.5V37/6 明赤褐色	
72	石製品	砥石	38.04土層	残存長29.1 幅5.3 最大厚1.6 最572.6			砂岩製
73	弥生土師	甕	S304調査区 炭化物層R-2	①(36.4) ②(12.3)	体部外面ハケテ 体部内面ナデ (口縁部 内外面3コナデ) 体部外面上段2条の突縁部付付	A:20cm以下の長石、右翼を多く含む、微細な雲母を含む B:良好 C:内5.0V7/2 浅黄褐色 外1.0V38/1 灰白色	板付目土式
74	弥生土師	甕	S304土師調査区 炭化物層	①(18.4) ②(16.9) ③(33.8)	割底外面ハケテ 割底内面ナデ (口縁部 内外面3コナデ) 割底外面ハケテナデナデ 割底外面下段2条の突縁部付付 割底外面に炭化物文様	A:30cm以下の長石、右翼、微細な雲母を含む B:良好 C:内5.0V7/6 褐色 外5.0V38/6 黄褐色	板付目土式
75	石製品	砥石	38.04土区 10層R-1	残存長20.3 幅1.1 厚29.3 最52.38			砂岩製
76	弥生土師	甕	遺構検出部 (5P1東)	②(2.7)	外面ナデ 他は調整不明	A:20cm以下の長石、右翼を多く含む B:良好 C:内5.0V38/4 浅黄褐色 外2.5V37/2 に近い褐色	

6. まとめ：第2次～5次調査からみた土地利用の推移

御陵遺跡第2次～5次調査では、弥生時代から江戸時代までの長期にわたる遺構・遺物が出土した。以下、これらの調査成果によって土地利用の推移について簡単に整理しておきたい（第54図）。

【弥生時代】弥生時代の遺構と遺物が比較的まとまって確認されたのは第3次調査区と第5次調査区である。また、第4次調査区でも弥生土器の小片が出土しており、これらの調査区で弥生時代、特に前期後半の人々の活動の痕跡を確認できる。第3次、第5次調査区は同一尾根上の斜面に立地するためひとまとまりの活動域と考えて差し支えない。両調査区ではともに竪穴住居跡が確認されており、居住活動が営まれていたものと考えられる。出土遺物がほとんどないため時期比定は難しいが、両調査区の土坑や貯蔵穴などからは前期後半頃の土器が出土しており、住居跡の一部もこの時期のものと推測される。

このように居住空間としての利用を想定できるが、出土遺物の量は両調査区で総じて少ない印象を受ける。とくに土器は多くは出土していない。一方で、両調査区で特徴的なのは石器が多い点である。資料化できたものはごく一部であるが、石鏃を中心とした狩猟具に加え、黒曜石を主とした石核や剥片など石器製作に伴う残渣が多く出土している。さらに、石砲丁に加え、挟入柱状片刃石斧や扁平片刃石斧などの大陸系磨製石器も出土している。このような出土石器の様相から、丘陵上での動物資源や木材資源の獲得、加工などが行われていたものと推定できる。弥生時代は半島由来の農耕が生産活動の中心として注目される。しかし、御陵遺跡第3次、第5次調査からは、狩猟や木材獲得に関わる生産活動がより色濃く伺われ、弥生時代の多様な生産活動の一端を垣間見ることのできる貴重な成果といえる。今後、周辺遺跡も含めた遺跡の性格の評価が課題となるであろう。

【古墳時代】弥生時代末～古墳時代初頭にかけてと推定される石蓋土坑墓が第3次、第5次調査区で合計3基確認された。これら3基は略北東～南西方向に主軸がそうろう。また、第5次調査で検出した石蓋土坑墓の北側ではわずかではあるが盛土が残存していた。これらの調査区から東に2つほど谷を挟んだ第4次調査区では古墳の主体部の可能性のある土坑が確認された。上でみたように弥生時代前期から中期にかけて居住活動域としても利用されていた空間が、弥生時代終末以降、埋葬地へと推移しているものといえる。このような景観は、御陵古墳群や唐山遺跡の様相から古墳時代後期から飛鳥時代ごろまでは継続する。

【古代】8世紀には、第3次調査2区で確認されたように平坦なテラス状の造成を行い、そこに掘立柱建物や溝などが構築される。詳細な用途については不明であるが、埋葬地としての景観からやや異なる空間利用を確認することができるであろう。

【中世】中世の遺構と確定できるものは、第2次調査から第5次調査にわたり確認することはできなかった。ただし、第5次調査で中世の土坑墓の可能性のある遺構が出土している。遺物を伴わないため、中世の墓と確定はできないが、平野部を挟んで南に位置する森園遺跡や薬師の森遺跡などで9世紀から13世紀にかけて土坑墓が営まれている（大野城市教育委員会2022）。今後の御陵遺跡周辺での類例の増加が待たれる。また、中世から近世にかけてと推定されるが、第4次調査で既存の溝の再掘削などが確認された。溝の用途など不明な点が残るが、中世における丘陵上での活

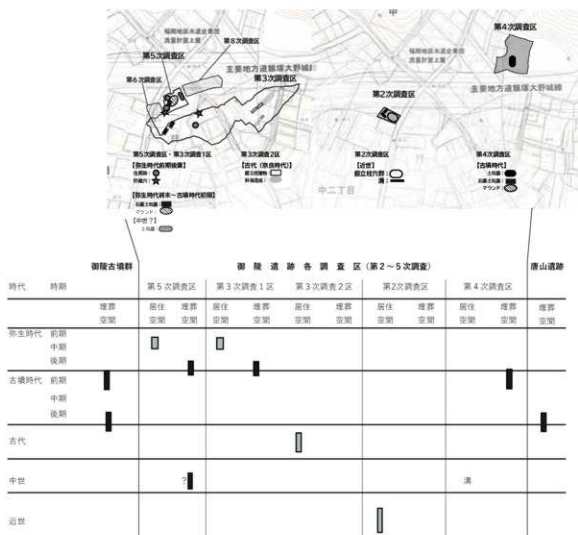
動の一端を示すものではあろう。

【近世】第2次調査では8世紀代の須恵器や中世の磁器に加え、近世陶磁器が土坑や溝から出土した。その中でSD02から出土した筒形椀は器形や文様などから17世紀前半の肥前系の磁器と考えられる。出土遺物は小片が多く遺構の時期を決めるには難しい部分もある。しかし、区画のような形状を呈するSD01に加え、建物こそ復元できなかったが根石を持つ柱穴が複数検出された点は、近世において何らかの居住に関連する土地利用がなされていた可能性があろう。

今後、周辺における調査が進み、中世から近世にかけての村落景観の変遷などが明らかになることを期待したい。

【文献】

大野城市教育委員会 2022『松葉園遺跡4』（大野城市文化財調査報告書第199集）



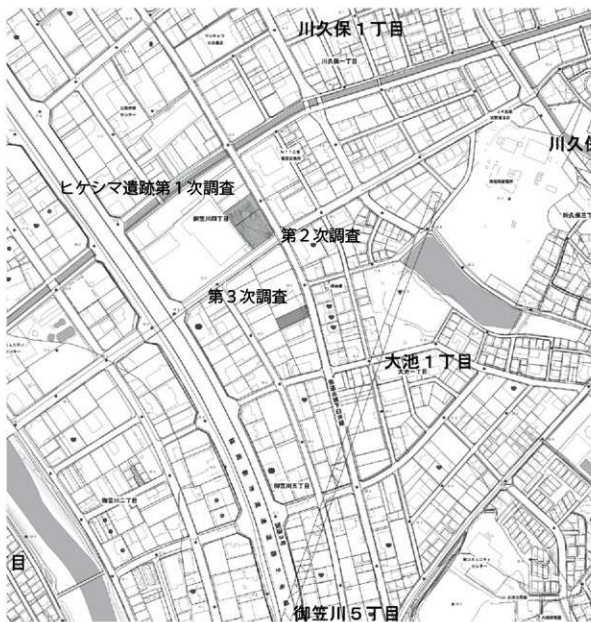
第54図 御陵遺跡第2～5次調査からみた土地利用の時代推移

IV. ヒケシマ遺跡第3次調査の結果

1. 調査の経緯と概要（第55～57図、図版23）

ヒケシマ遺跡は御笠川4～5丁目、川久保1丁目に広がる遺跡である。乙金山から派生する丘陵先端部に立地し、西側は平野部に接する。標高は18mである。

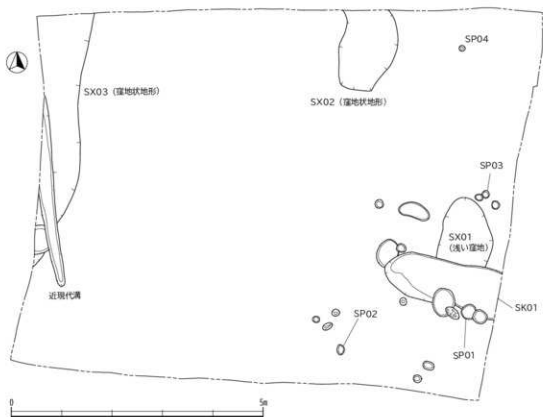
本報告の調査地である御笠川5丁目2番6他について埋蔵文化財の照会を受け、平成18年4月23日に試掘調査を行った。試掘の結果、開発対象範囲の南東隅、地表下190cm程の深さで遺構が確認された。対象地では店舗兼工場の建設が予定されていたことから、開発面積8,300㎡のうち80㎡について発掘



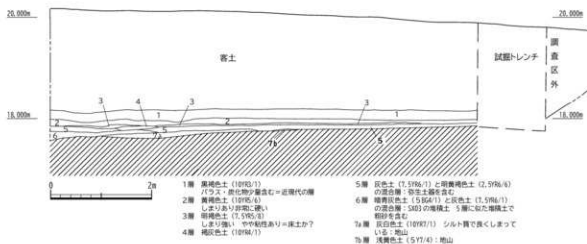
第55図 ヒケシマ遺跡第3次調査区の位置図 (S=1/5,000)

調査を行った。調査期間は平成19年11月8日から11月22日である。

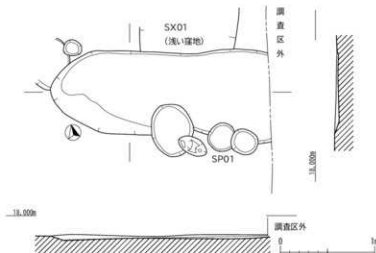
調査の結果、土坑1基とピット複数が確認された。これらの遺構からは弥生時代の土器や石鏃などが出土した。また、調査区内で複数の自然の落ち込みを確認した。調査区西端部の落ち込みからは弥生時代の土器が出土した。



第56図 ヒケシマ遺跡第3次調査遺構配置図 (S=1/75)



第57図 調査区北壁土層図 (S=1/75)



第 58 図 SK01 実測図 (S=1/40)

2. 調査の結果 遺構と遺物

(1) 土坑

SK01 (第 58 図、図版 24)

遺構は調査区南東部に位置し、調査区の東壁に接する。遺構の一部は調査区外にのびるが、確認された遺構の形状から、東西方向に長軸をとる長楕円形を呈する。最大長は 2.3m、最大幅は 0.9m を測る。遺構の深さは検出面から 5cm と浅い。床面はほぼ平坦である。遺物は、弥生土器の細片が出土した。風化が著しく細片のため資料化はできなかった。

(2) 性格不明遺構

調査区内で 3 箇所ほど性格不明の土坑状の窪みを検出したが、いずれも自然な窪地状の堆積と判断した。出土遺物は SX01 からは弥生土器の細片が 10 点ほど出土したが、いずれも図化できない小片であった。SX02 からは土師器および弥生土器の細片が出土したが、同様にいずれも図化できない小片であった。SX03 からは以下に報告する資料以外にも弥生土器の細片と黒曜石片が出土しているが、小片のため資料化できなかった。

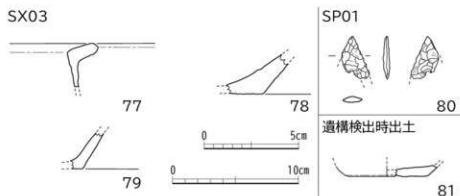
SX03 出土遺物 (第 59 図・図版 24)

弥生土器

甕 (77 ~ 79) 77 は逆「L」字形の口縁部片である。器面の荒れが著しく調整は不明である。78 は甕の底部小片である。器面の荒れが著しい。79 も甕の底部片である。外面はナデ、内面は器面の荒れがひどく調整不明である。

(3) ビット

調査の結果、ビット 17 基を確認した。以下に報告する SP01 で出土した遺物以外にも、SP02、SP04 からも黒色土器の細片が出土したが、いずれも小片で資料化することはできなかった。



第 59 図 ヒケシマ遺跡第 3 次調査出土遺物実測図 (80 は S=1/2、その他は S=1/3)

SP01 出土遺物 (第 59 図、図版 24)

石製品

石鏃(80)安山岩製の石鏃で、基部の一方を欠損する。最大長 2.2 cm、最大厚 0.35 cm、重量 0.6g である。

(4) その他の出土遺物

以上の遺構から出土した遺物以外に、調査区壁面の包含層や遺構検出時、あるいは表土などからも遺物が出土した。表土中からは白磁の小片、調査区北壁の第 5 層からは弥生土器甕小片、東側壁面第 1 層からは弥生土器の甕片や壺の小片などが出土した。いずれも小片で図化できなかった。また、遺構検出時にも遺物が出土している。資料化できるものは以下の弥生土器のみだが、その他にも須恵器小片、弥生土器の細片、黒曜石片などが出土している。

遺構検出時出土遺物 (第 59 図)

弥生土器

壺 (81) 小形の壺の底部であろうか。内面はナデ、外面は器面の荒れのため調整不明である。

表7 ヒケシマ遺跡第3次調査出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	①口縁部②底面③高台④蓋部⑤最大径部(横元部)(残存部)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
77	弥生土器	甕	S303	②(3.15)	内外面磨面される 調整は不明	A:4mm以下の白色砂粒と黒石を多量に含む B:良好 C:内外10V30/16白色	
78	弥生土器	甕	S303	②(3.15)	内外面摩面の為調整不明	A:4mm以下の白色砂粒、黒石を多量に含む B:良好 C:内10V17/25に白い黄褐色、外7.5V30/4浅黄褐色～10V30/2浅黄褐色、10V37/16白色	
79	弥生土器	甕	S303	②(3.85)	外面ナデ 内外面摩面の為調整不明	A:3mm以下の白色砂粒と黒石を少量含む B:良好 C:内5V12/1黄褐色、外5V15/46に白い赤褐色	
80	石製品	砥	SP1	残存長3.2 残存幅1.2 厚0.35 重0.6			安山岩製
81	弥生土器	甕	遺構検出時	②(0.8) ③(0.6)	底面外面摩面の為調整不明 底面内面ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を多量に含む B:良好 C:内外10V30/8黄褐色～10V30/20白色	

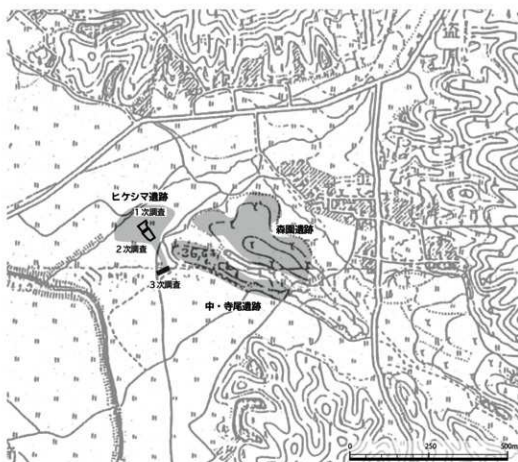
3. まとめ

ヒケシマ遺跡ではこれまで第1次、2次調査が行われており、第3次調査対象地の北西約100mのところに位置する。第1次調査では、主に弥生時代中期初頭、城ノ越式期の土坑が多く確認され、調査地の西側で多くの遺構が検出されている。また、溝からは中期前半の土器が出土しており、中期中頃から後半にかけての甕棺墓も確認されている。さらに5世紀前半頃の土師器高杯がビツから出土している。

第1次調査の南東に隣接する第2次調査では中期前半の竪穴住居1基、詳細な時期は不明ながら貯蔵穴と推定される土坑などに加え、中期後半の甕棺墓1基が確認されている。また、中期初頭頃の土器が出土した土坑も検出されている。そのほかにも古式土師器に加え、Ⅳ期および8世紀後半の須恵器や10世紀後半の土師器など様々な時期の土器が出土している。

このような2次にわたる調査の結果から、調査範囲の南東側に中期中頃から後半の甕棺墓群が営まれ、北西側に中期前半の集落域が想定されている(大野城市教育委員会2005)。また、1、2次調査の西側で確認調査が行われ、両調査区の西側は遺跡の縁辺部にあたるということが明らかにされている(大野城市教育委員会2007)。

以上のような既往調査の成果と対比すると、第3次調査では東側の丘陵に近い部分でわずかにSK01やビツが確認され、調査地の西側では自然のくぼ地状の地形が確認されているという状況であり、遺構密度が非常に低くなっている。また、遺物は弥生時代中期の土師の小片や石鏃が出土したが、数量的にも非常に少ない。1、2次調査区に比べ若干標高が高く遺構の残存程度から後世の削平をかなり受けていることはあろう。ただ、調査区北壁の土層の堆積状況でみられるように地山である7層と弥生土器を含む5層などの土層が東から西側、すなわち御堂川に向かってゆるやかに低くなっており、調査区東側に位置する中・寺尾遺跡が広がる舌状低丘陵の西側裾部に今回の調査区は位置するものといえる。このようなことから、中・寺尾遺跡と一連の遺跡でその遺跡範囲の西側の縁辺部であろうことが推測される。今後の周辺の調査によって、既往の1、2次調査で確認された遺跡の広がりや空間利用の在り方を含めより詳細にヒケシマ遺跡の様相と隣接する中・寺尾遺跡や森園遺跡との関係が明らかになること



第 60 図 ヒケシマ遺跡と周辺遺跡の位置 (S=1/12,000)

が期待される。

【文献】

大野城市教育委員会 2005 『ヒケシマ遺跡』(大野城市文化財調査報告書第 67 集)

大野城市教育委員会 2007 『森園・ヒケシマ遺跡』(大野城市文化財調査報告書第 74 集)

圖 版

(1) 御陵遺跡第2次調査区
遠景（北西から）



(2) 御陵遺跡第2次調査区
近景（北から）



(3) 御陵遺跡第2次調査区
全景（北から）





(1) SK01 埋土中遺物出土状況 (西から)



(5) SP01 根石出土状況



(2) SK01 完掘状況 (西から)



(6) SP04 根石出土状況



(3) SD01 (3-4区間) 土層堆積状況 (南から)



(7) SP05 根石出土状況



(4) SD03 (1-2区間) 土層堆積状況 (南から)



(8) SP09 礎出土状況



(1) 御陵遺跡第3次調査1区全景
(東より)



(2) 御陵遺跡第3次調査2区全景
(西より)



(1) SC01 周辺近景 (南から)



(2) SC01 遺物出土状況 (南から)



(3) SC01 土層堆積状況 (東から)

(1) SC01 内 SK10
炭化物出土状況（南西から）



(2) SC02 ピット検出状況（西から）



(3) SC02 完掘状況（東から）





(1) SX07—SB01



(2) SX07—SB02



(3) SX08 全景

(1) SB01—SP06



(2) SX07—SD02 土層堆積状況
(南西から)



(3) SX07—SD02、03
土層堆積状況 (南西から)





(1) 1号(奥)、2号石蓋土坑墓(手前)
検出状況(南西から)



(2) 1号石蓋土坑墓検出状況
(北東から)



(3) 1号石蓋土坑墓遺物出土状況
(東から)

(1) 1号石蓋土坑墓完掘状況
(北西から)



(2) 2号石蓋土坑墓検出状況
(北西から)



(3) 2号石蓋土坑墓完掘状況
(西から)





(1) SK04 完掘状況 (東から)



(5) SK14 完掘状況 (北から)



(2) SK06 土層堆積状況 (西から)



(6) SX02 遺物出土状況 (東から)



(3) SK09 完掘状況 (西から)



(7) SX04 遺物出土状況 (西から)



(4) SK13 上層土器出土状況 (北から)



(8) SX05 遺物出土状況 (東から)

(1) 御陵遺跡第4次調査区
遠景（南から）



(2) 御陵遺跡第4次調査区北部
SD01 周辺（南から）



(3) 御陵遺跡第4次調査区南部
SK01 周辺（北西から）





(1) SK01 検出状況（北から）



(2) SK01 土層堆積状況（東から）



(3) SK02 全景（南から）

(1) SD04 (北西から)



(2) SD04 (4-5区間)
土層堆積状況 (西から)



(3) 調査区南隣地マウンド状地形
(北から)





(1) 御陵遺跡第5次調査区（西より）



(2) 御陵遺跡第5次調査区（東より）

(1) SC01 完掘状況 (北東から)



(2) SC02 土層堆積状況 (東から)



(3) SC02 完掘状況 (北から)





(1) マウンド検出状況(東から)



(2) SK03 蓋石検出状況
(南西から)



(3) SK03 完掘状況(西から)

(1) SK03 埋土堆積状況
(南西から)



(2) SK03 蓋石上縦断面
(西から)



(3) SK03 蓋石除去後縦断面
(西から)





(1) SK01 土層堆積状況(南から)



(2) SK01 完掘状況(北東から)



(3) SK04 土層堆積状況(南から)

(1) SK04 炭化物出土状况



(2) SK04 炭化物下層断面



(3) SK04 炭化物層
遺物出土状况





2



15



3



16



4



17



6



8



36

30

19

64

18



35



49



38



50



39



54



46



55



69



70



72



73



74



75

(1) ヒケシマ遺跡第3次調査区
全景（北西より）



(2) ヒケシマ遺跡第3次調査区
全景（東より）



(3) 調査区北壁土層（南東より）





(1) SK01 (東より)



(2) SX03 (南東から)



77



80

(3) ヒケシマ遺跡第3次調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ごりよういせき 1		ひけしまいせき 2					
書名	御陵遺跡 1		ヒケシマ遺跡 2					
副書名	第2～5次調査		第3次調査					
巻次								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第226集							
編著者名	石川 健							
編集機関	大野城市							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 電話092(501)2211							
発行年月日	2025年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	°			
御陵遺跡 第2次調査	福岡県大野城市中2丁目			33° 32′ 57″	130° 29′ 14″	2006.3.2～ 3.28	260㎡	住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
御陵遺跡 第2次調査	集落等	江戸時代	溝・ピット	陶磁器		土坑1基、溝2条、ピットが検出された。		
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	°			
御陵遺跡 第3次調査	福岡県大野城市中2丁目			33° 32′ 57″	130° 29′ 7″	2006.5.9～ 10.24	4,100㎡	県道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
御陵遺跡 第3次調査	集落・墓地	弥生時代・ 古墳時代・ 古代	竪穴住居跡2基・ 貯蔵穴・石蓋土坑 墓2基・掘立柱建物 3棟	弥生土器・須 恵器・石器		弥生時代の竪穴住居跡、貯蔵穴や 古墳時代初頭の石蓋土坑墓2基など が検出された。		
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	°			
御陵遺跡 第4次調査	福岡県大野城市中2丁目			33° 32′ 59″	130° 29′ 18″	2006.10.3 ～11.30	810㎡	県道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
御陵遺跡 第4次調査	墓地	古墳時代・ 中世・近世	土坑2基・溝複数	弥生土器・磁 器				
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	°			
御陵遺跡 第5次調査	福岡県大野城市中1丁目			33° 32′ 57″	130° 29′ 5″	2008.9.3～ 10.22	4,100㎡	県道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
御陵遺跡 第5次調査	集落・墓地	弥生時代・ 古墳時代・ 古代	竪穴住居跡2基・ 貯蔵穴1基・石蓋 土坑墓1基・土坑	弥生土器・石 器		弥生時代の竪穴住居跡2基、貯蔵 穴1基や弥生時代末～古墳時代初 頭の石蓋土坑墓1基が検出された。		

要約	御陵遺跡第3・5次調査地点では弥生時代前期後半から中期の住居跡や貯蔵穴などが確認された。また、弥生時代終末から古墳時代初頭とみられる墳墓の主体部が第3次、第5次調査で確認され、第4次調査地点でも古墳の主体部と推定される土坑が確認された。いずれも時期比定可能な遺物を伴っていないが、周辺の様相などから弥生時代末頃に降墓地としての土地利用が盛んとなる。また、第3次調査地点では古代に丘陵斜面を造成した上で掘建柱建物構築されていた。建物の用途や機能については不明であるが、古代には埋葬地とは異なる土地利用が行われているものと考えられる。今回の調査で中世の遺構と確定できるものはなかった。ただし、遺物を伴っていないため時期比定に難があるが、中世墓の可能性のある土坑墓が第5次調査で確認された。近世については、第2次調査地点で区画溝の可能性のある溝や根石を伴うピット複数が確認された。近世における中村の様相を知るうえで重要な成果である。							
	ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
ヒケシマ遺跡 第3次調査	福岡県大野城市御笠川5丁目			33° 32' 35"	130° 29' 14"	2007. 11. 8 ～11. 22	80㎡	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
ヒケシマ遺跡 第3次調査	集落	弥生時代	土坑1基	弥生土器・石器				
要約	ヒケシマ遺跡第3次調査地点では、土坑1基と自然な落ち込み状の窪地で遺物が出土した。出土遺物の量は少量で、わずかに弥生時代中期の土器片や石製品などが出土した。既往調査の第1次調査地点や第2次調査地点に加え、その西側で遺跡の範囲確認調査がこれまで行われているが、東に隣接する、中・寺尾と一連の遺跡の縁辺部にあたることが指摘されている。第3次調査地点でも遺物や遺構の密度は低く、かつ現地表面の標高などから調査地の西側にはやや低い谷状の地形が北側から入り込んでいることがわかる。今回の調査成果からも調査地がヒケシマ遺跡の縁辺部であることが確認できた。							

大野城市文化財調査報告書第226集

御陵遺跡 1

ヒケシマ遺跡 2

令和7年3月31日

発行 大野城市
〒816-8510
福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 有限会社 成光社
〒815-0082
福岡県福岡市南区大楠1-29-33

